

寛放録

九

昭和五年八月中流起筆

特別  
14  
1919  
426



寛政録九

○散策神田の村口者店と三宅有り回考と通ふ東  
 本西起記三回史せと大河内家々々出でし  
 ころと弱る珠もし、西遊記をぬ本を版大  
 字本より二十冊日あり桂をい家人と見えふ所の  
 ころより、三四巻ハ嘉納の語りて後少海より三十  
 冊、前年又求重ハ天下の珠とせん海ありと  
 同敷し、共ハ價高くとしと猶心得す、僅ハ凡大河  
 内桂岡の歌著、金蘭ハ係の字を二冊を指し  
 乙内く、桂岡の遺事ありも三を贈り、この歌  
 著ハ支那ハ後ハ体ハ似ありと花柳の書を叙

月色 さゆ

(昨夜新議事堂にて撮影)



一巻の、巻首、岐の序あり、桂園の自筆  
と云く、桂園の支那の説を漢みやと  
見し、その花本は北等在の本あり、偶に  
あり

○唐宋詩雅と云ふ二十枚足らずの刊本を贈ふ、城  
後尼瀬の醫長又川松山の遺著、俾り、東武  
平山元亮の修校する所とし文化乙亥の彫版也  
全巻唐宋の詩流と云ふ著者、お南の談見  
あり、其書あり、其未以御國又此人あると云  
ふ、巻末、著書八種を録す、己刊の部、症瘕  
論四冊、病源抄二冊、脚氣方考一冊、蔡襄里症  
一冊あり、未刊又醫家論傷寒論二冊、病源抄外傳

標

一冊病源抄の外傳二冊あり、相高の著述家と云く  
と云ふべし、紙後著述家目録の缺と補之と  
して云く、紙一冊あり

八月十日

○五月二十日と云ふ起筆、迄著下早稲田の人事に  
関するものを紙一冊あり、二十五の姓を八十二家  
の思ひ云を紙す、大体毎の五家を紙す、物故し  
る、其腹巻を主とし、傍ら早稲田の縁あり、  
人及び、枚数なる四五十頁を巻く、其記す、  
河津、文のり、人少からざるも、早稲田の詳か  
らざるもの多きが、紙一冊あり、百名と云ふ、  
紙一冊あり、その二十名の、自らの神書  
と云ふ、其書を下す、紙一冊あり、世に不實も、

千の様な今早稲田の枝あるまゝと冬風すもも  
 書きたるまじ也、学校に存する記録に徴し且の校友  
 親をすまひ得る不あらん、八月十六日記  
 ○一簇の駿河菊を摘み来り床頭を置き口の動  
 ぶ風流甚だしく若くもすく、今正しく美あり、まゝ  
 一変す、往年一五六瓶の以をも折れ、寒中復す  
 のり法を得ると、植替を行ふ方も多かり、皆枯朽す  
 再来の菊を置くことを休む、二十年して初めて一  
 瓶あり、故人(馬)の思ひあり、冬期に別んべ、今が  
 一葉終つて花をすくことを切す、



避暑難

和田 萬吉

夏は暑く冬は寒い。これは天地開  
 びやく以來きまり切つた事で人間の  
 智慧才覚ではどう改變のしようも無  
 い。けれども夏は涼しく冬は暖であ  
 りたいのは人情で、これまた無理の  
 ない願望である。夏は暑く冬は寒い  
 ものと十分承知してゐながらも夏が  
 くれれば暑い、冬がくれれば寒いとは  
 いふ。これがまた恐らくいつの世に

暑い。自然雨戸は開放して、えたいの  
 知れない虫が飛込み放題である。都  
 會では體裁もある、用心が悪いとい  
 つて三重三重に戸締を嚴重にする家  
 の人がこの有様であるから他は推し  
 て知るべし。こんなわけで子供など  
 は忽ち寝冷えて腹加減を悪くする。  
 醫者上薬よと騒いでも急には間に合  
 はない。

文句をいつても千  
 るから鼻息は荒  
 ゆけがしの顔を上  
 から焼けるやうな  
 で緩和する。所が  
 多くにはか仕立で  
 食物を平気で賣  
 察者が取締に手  
 こんなわけで宿  
 陥り、外で食へば  
 避暑もまた難い。

たし第一の悲哀は何であらうか。  
 海を前に控へた温泉場ならいざ知ら  
 ず、一般海水浴場附近の旅館では朝  
 から風呂をたきつけて避暑客の便  
 を計つてくれる所はまづない。あつ  
 たとしても先客があつたり後がつか  
 へたりして思ふ様に身體を洗す事が  
 出来ない。多少の鹽氣や砂は我慢し  
 て着物を着てしまふ。身體がねばね  
 ばしたりむづ／＼して來ても文句の  
 だしやうもない。  
 第二の悲哀は何か。海岸地方の宿  
 間にも自ら遠慮  
 つた廊下の通行  
 さつが要る。そ

新聞欄  
 野間清治氏  
 報知新聞社長となる  
 講談社の野間氏は報知社幹部の選  
 用紙値下  
 新聞紙  
 諸物價の底  
 は新聞紙の定  
 と、販賣店側  
 し是非原價の



本田正次氏 共著  
 向坂道治氏  
 大綱日本直物予頭學

年中行事の  
 圖書大市會開會

今秋の大市會は十月七日より三日  
 間、上野公園常盤華壇に於て開催す  
 る事に決定しました。今回は目下の  
 不景氣を吹き拂ふ意味に於て、従來

妖怪畫談全集  
 第四回配本にて打切り

中央美術社發行の妖怪畫談全集は  
 編者が外國なる爲め、原稿を受取る  
 手續に種々故障を生じ、圓滑に發行  
 出來ざる爲め本月下旬日本篇下巻を  
 以て、打切事になりましたから、此

新聞欄

野間清治氏  
 報知新聞社長となる  
 講談社の野間氏は報知社幹部の選

用紙値下  
 新聞紙

諸物價の底  
 は新聞紙の定  
 と、販賣店側  
 し是非原價の

あまのこころをなぐさむ



避暑難

和田 萬吉

夏は暑く多は寒い。これは天地開きやく以来きまり切つた事で人間の智慧才覚ではどう改變のしようも無い。けれども夏は涼しく冬は暖でありたいのは人情で、これまた無理のない願望である。夏は暑く多は寒いものと十分承知してゐながらも夏がくれば暑い、冬がくれば寒いと人はいふ。これがまた恐らくいつの世においても不變の言葉であらう。しかしながら多くの人は夏の暑さの方が冬の寒さよりもしのぎにくいと考へて居るらしい。論より證據夏がくれば都會のブルは一家を擧げて、あるひは海へ、あるひは山へ出かけて行く。これを稱して避暑といふやうである。然るに冬はどうであらうか、これ等の人も冬は多く家に落着いてゐるやうである。即ち避暑に行く人は澤山あつても避暑する人は極めて少い。五六年に一度避暑を止めて避暑に代へるといふ人も先づないと思つてよい。これには如何なる理由があるのであらうか。謂はば一種の流行であり虚榮であるのであらう。甲の家で蓄音器を買つたのを眞似て乙の家でも一臺買つて朝から負けずになう／＼／＼／＼競争するのと同じ心理である。毎年避暑地が賑はひを増して行くのは日本に金持が殖えて來

た證明ではない。流行を追ひ外見を張る連中の多く成行く結果に過ぎないのである。

試みに今夏は湘南あるひは房總方面に避暑に行きますと如何にも誇らしげに吹聴する人の跡を跟けて見るとよい。成程彼等の落着先は湘南あるひは房總の海邊であるには相違ない。けれども必ずしもそこには堂々たる別荘が待受けてゐるわけでもない、又貸別荘と稱する類を獨占する様子もない。多くは豫め約束して置いた上中下各様の旅館に陣取る。陣取るといへばいかにも大層であるが實は六疊乃至八疊の座敷に二三人づゝの入込である。あるひは平常に見るも汚いと思ふやうな百姓あるひは漁師の離れ座敷、それもうまく行つてのこと、多くは主人の居間の隣室を拜み倒して借受ける。幸ひに天氣が良ければ晝は海に出て水を浴び砂の上に寝ころんで居れば一日を送れるが、一たび雨に降り込められたら事である。殊に夜なぞはほとんど雑魚寝で色の眞黒な半裸體の人間同志ごころごころがらつてゐるあたりは、さながら本所深川邊の木賃宿を思はせて誠に凄惨たるものがある。室内は人いきれでむん／＼するのでしめれば

暑い。自然雨戸は開放して、えたいの知れない虫が飛込み放題である。都會では體裁もある、用心が悪いといつて二重三重に戸締を厳重にする家の人がこの有様であるから他は推して知るべし。こんなわけの子供などは忽ち寝冷えで腹加減を悪くする。醫者よ薬よと騒いでも急には間に合はない。

まづ第一の悲哀は何であらうか。海を前に控へた温泉場ならいざ知らず、一般海水浴場附近の旅館では朝から風呂をたきつゞけて避暑客の便を計つてくれる所はまづない。あつたとしても先客があつたり後がつかへたりして思ふ様に身體を洗す事が出来ない。多少の鹽氣や砂は我慢して着物を着てしまふ。身體がねばねばしやうもない。

第二の悲哀は何か。海岸地方の宿屋は夏が挿入時である。一年の儲けを夏で取るのが彼等の商法である。この方寸から客扱ひをするのであるから堪まつたものではない。何しろ大勢の客を扱ふのであるから何事の時にも一定してゐない。海岸でさんざん照りつけられ空腹を抱へて歸つて身體を拭つてはつとすると餘計に空腹を感じた。所が待てど暮せど膳を持つて來ない。再三催促した揚句漸く御飯の香をかかして貰へる。しかもその獻立を見てすつかり落膽する精々の所で正體不明の魚の刺身が五六切、小魚の鹽焼あるひは齒の立たぬやうな鮑の酢の物に漬かり切らない胡瓜か茄子の香の物である。それでも脊に腹は代へられずはしを着ける。これでは榮養も何もあつたものではない。忽ちグイタミンA、B、C、Dの欠乏を感じる。宿の亭主に

文句をいつても千客萬來の有様であるから鼻息は荒く、不足ならは出てゆけがしの顔をする。しやくに障るから焼けるやうな食慾を外の飲食店で緩和する。所がこの飲食店がまた多くにはか仕立で腐敗しかつた飲食物を平氣で賣る不徳商人で毎夏警察署が取締に手を焼く代物である。こんなわけで宿に居れば榮養不良に陥り、外で食へば生命に危険を及す。避暑もまた難いかなである。

凡一戸を構へて居ても近所交際はなか／＼むづかしいものである。まして壁あるひはふすま一重を隔てれば隣の城廓で群雜劇居する旅館においては一層の事である。一家談笑の間にも自ら遠慮があり、障子を取拂つた廊下の通行には形式的にもあいさつが要る。それで濟めば天下泰平であるが、とかく起り易いのはにらみ合である。結果としては愉快を求めに來て不快を買ふ。しかしながら態々留守番まで履つて近所に宣傳して來た手前、直にも歸り兼ねて不平悶々の内にもかくも二三週間を過していざ引あげとなる時のうれしさ意氣揚々と凱旋將軍よろしくの足取りで歸京する。そして近所の家にはお土産を配り、長逗留の手前眞實もいひかねて事實を逆にして話す。そして最後にいふ事が良いではないか是非來年はお宅様でもお出かけになつては如何と。

このやうに異郷の空で萬事に不自由を感じながら、しかも暑氣と戦ひ虫に攻められつゝ暮す事が何で避暑といへやうか。いかに海はほらばくととして廣く、煙波蒼波を見はるか

して、一度こゝに臨む時はだれしも雄大寛かつの感に打たれる。かつ三伏の暑さも水に入れば忽ちしのぐ事が出来る。とはいつても物には程度がある。人間は魚族ではない。程度を越せば顔色蒼白となり、全身に寒氣を生ずる。人魚か乙姫でない限りは水中生活は出来ない。一度水から出れば砂は焼けつくやうに暑い。上からは眞夏の太陽が遠慮會釋なしに照りつける。けれどこれが日光浴の極致であらう。水氣は忽ち蒸發して白く鹽分が身體に残る。皮膚は、黄色より次第に赤味を帯び來り、所に鹽氣がしみ込むので、痛いやらかゆいやらで泣きたくなる。この難行苦行を繰返すと、やがて全身が暗黒色に染上つて、一人前の避暑客の資格を與へられる。何の事はない人間の生きたまゝの鹽燒である。けれど避暑は被暑に通ずるのであらう。

我人は決して避暑を一概に拒否しはしない、但し上に述べたやうなのは名ばかりであつて、眞の避暑とは受け取れない。一旦緩急ある秋に勞苦に耐へるための一つの試練としか考へられない。名に實の伴つた避暑こそ望ましいものである。

夏は暑いといつても元來が温帯の日本の事、さう無暗に人死は出ない病人や極老でない限りは確に東京の暑さに對抗出来るはずである。しかしながら夏休がある目的を以て設けられてゐる以上は、それを十分有効にし使用せねばならない。要はその用法の如何にある。(元)



を清く展て見よ

標元未故三先考

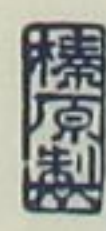
凝秀三人書

とあり、平一有栢客希息女の為書しとお手  
本の捧け等ともあり一見心算子控りきこよや  
凝秀の●有栢川希息女の書室の御也  
前年神戸奉一の産まに出生額を山陽にお  
手も捧け等ともあり、命額の出れば

如南山之壽

大龜堂 瑞  
後吉平 瑞  
長

口口口



凝秀の室の希息女の御書ありこと之を  
て見ふべし 琺君の希名とてくす、此額面  
山陽の印の捺しあり、後々捺しあり、印  
もあり、べきことあり、一り幅に印あり  
ハ宜ろふなりとす、此希息女の産まの  
流印家へ嫁さんか、方、此年の額、前年  
産まに、出で六千九百三十九日の高僧ありと  
んす、此より此一行幅或許の便ありや

八月十八日記

○八月十九日、ふあき、思ひ、城由、(思)を、越海  
の在、訪ふ、まの、を、あ、す、例の、こと、く、程、の  
の、誤、湯、き、七、時、間、升、り、時、の、移、る、と、か、た

かりし、道遷の後の内、野口英世の事あり、

野口が福島の仰よりありし頃の、小石坂本

小林紫とし、往復したる、とありしと道遷

の後、いぬる、とありしとありしと道遷

のこと、小林と往復したる、とありしと道遷

とありし、とありし、とありし、とありし、

口清心といふ、医学書生が、故郷より、

賢く矢張り、とありし、とありし、とありし、

もと清心が、姓も名も、とありし、とありし、

と英世の、とありし、とありし、とありし、

小林とありし、とありし、とありし、とありし、

とありし、とありし、とありし、とありし、

横濱製



故野口英世博士

### 發奮の動機

『當世書生氣質』

恩師小林翁と道遷博士の  
往復文書から意外の現れ

### 故野口英世博士

【會津若松校】故野口  
英世博士の恩師として  
稱かした、博士の偉業に大きな原動力となつた、福島縣猪苗代町私立日新館長小林榮氏に對し、同地方有志は廿三日午前猪苗代小学校に古稀祝賀會を開いたが、その際發起人から會衆に配つた小林氏の傳記により、猪苗代町内博士との往復の手紙によつて、故野口博士發奮の興味あ

#### 小林榮氏の手紙

【會津若松校】故野口英世博士の恩師として稱かした、博士の偉業に大きな原動力となつた、福島縣猪苗代町私立日新館長小林榮氏に對し、同地方有志は廿三日午前猪苗代小学校に古稀祝賀會を開いたが、その際發起人から會衆に配つた小林氏の傳記により、猪苗代町内博士との往復の手紙によつて、故野口博士發奮の興味あ

#### 坪内博士の返事

英世博士は多分九歳か十歳にておはし候ひけむ、姓名の類似は申す能くもなく偶然に候、何れも御著書にありしと、野口清作なる醫學生ありて恰も野口清作を記す如き有様を讀み深く驚嘆仕り候、私も之に同情して英世と改名仕らせ「世界の醫界に

候ひしに過ぎず候、ども借金番付の如きは多少よりどころありしものに候

いつれにせよ四五、六年前の悪作におもひ出すさへ汗淋漓に候、然るに、おの如きの思ひが、けすも真個世界の大手故博士御發奮の一機縁と相成りしとは、一に是れ貴下の御高論と故博士の英邁なる天資の然らしめし所たるや申すまでもなき候と存候、さるに、世に珍らしき御物かたり、若し御せしつかへなくば御仰せ稱し、まことに故博士の小傳をも加へて拙文に綴り、(中略)公にせば、今一世に瀾漫する情氣、熱氣を多少過らすに足るべきかと考へ候御快話下さるべきやいか、然らんに、故博士が少年時の御事蹟、順天堂へ御入學當時の概略等も承り度候

洵に一個の林檎の落ちたるも心あると心なきとにて之を見たる結果雲泥の差を生ず、返すも、も世の心なきともからを喚醒するに力ある御話とこそ存候へ、不取敢御返事まで如此候

禮の頃こしもの

今その傳中

助稿へ、とあり

野口が、とあり

いぬる、とあり

とありし、とあり

とありし、とあり

とありし、とあり

とありし、とあり

とありし、とあり

とありし、とあり

とありし、とあり

忘印しあるは此の候も



かりし、道達の後の内、野に英世の事あり、  
 野に福崎の仰るありし頃の、小倉校長  
 小林紫としりく、往復し、ことありと道達  
 の後、ぬきこし、よとて見ると、言の  
 ことが小林と往復し、動機と知れ、言の  
 子と云ふ、道達の書生氣味、のゆゑ、野の  
 口清心といふ、医書書生が、故、藤よ、ま、  
 賢く、矢敗し、比りと云ふ、一、野の、名が  
 もと清心、姓も名も、あ、似、あり、な、  
 ら、英世の、ま、を、言、ひ、た、く、も、又、く、  
 小林と、道、達、に、賢、河、し、な、と、往、復、の  
 こと、な、ら、う、と、端、緒、を、う、道、達、が、書、生、  
 氣、味、



竹と、も、き、り、時、英世の、十、年、程、の、頃、こ、の、  
 頃、あ、り、道、が、英世を、知、る、若、く、も、今、こ、の、傳、中  
 る、ん、ど、も、道、に、名、を、改、め、り、動、機、は、ど、ん、ど、  
 り、と、小林の、後、り、と、云、と、云、ふ、道、に、  
 前、病、の、為、め、又、天、を、こ、入、院、し、た、こ、と、あ  
 り、其、時、初、め、も、書、生、氣、味、を、執、漢、と、  
 端、緒、を、し、り、名、を、改、め、り、故、藤、道、生、の、あ  
 り、氣、味、を、腐、し、た、の、も、見、あ、り、行、き、り、小林が  
 名、を、氣、味、と、し、た、も、道、達、を、改、め、り、  
 かと、英世と、改、め、り、其、時、の、事、と、い、ふ、自  
 己、書、生、氣、味、を、口、清、心、と、改、め、り、  
 こ、意、印、し、た、ん、こ、の、後、も、又、き、り、

英世の事あり、野に福崎の仰るありし頃の、小倉校長小林紫としりく、往復し、ことありと道達の後、ぬきこし、よとて見ると、言のことが小林と往復し、動機と知れ、言の子と云ふ、道達の書生氣味のゆゑ、野の口清心といふ、医書書生が、故、藤よ、ま、賢く、矢敗し、比りと云ふ、一、野の、名がもと清心、姓も名も、あ、似、あり、な、ら、英世の、ま、を、言、ひ、た、く、も、又、く、小林と、道、達、に、賢、河、し、な、と、往、復、の、こと、な、ら、う、と、端、緒、を、う、道、達、が、書、生、氣、味、

一私を感ぜ、自分と英世との舊関係を毛細の  
肉息と語りたり。中にも自分の行下生石塚  
三郎との密な関係ある事まで述べて英世の  
事を悉く知りたる事ありけり。或や抑留した折  
初めて面会したる事を説きし血闘守しゆか  
若公と吉林の大家三十数人とせし密に  
も招待したる時又返答する事余が一名其  
席をかくえ而も上座より豆の血闘を  
余の加つて居る所ゆゑ一日一校に及べし事  
中にも英世も滞在二十日の末の  
付の大隈侯に宛て一言も回答せし  
かひごく喜ばし事と、其日あるに於ける余が



草履に密に付の焼芋と於し、牛鍋と  
難の竹の子を下物酒を飲みかへし密に  
を煮かへし事と、中にも英世の血闘三十日  
間の赤十字愉快の日も英世も草履を密に  
の為の押さをもする事余も英世の密に  
の氏名を刻しし印二顆と筆研を好む  
事、このころにも英世の印を入れたる英世の  
英世を映書に仕入らば見たりとの下心が  
あるか、英世に就て余は問ふ不届の密細  
に済む、余も此の所を語る者との英世  
十年の事英世も英世の侍、少年の立志と  
映書に現する事此上なきぬ材料、さう、後ん

世界にいかん人たう、映意のゆゑ大隈侯に  
湯を所を極めを要する、君の所を焼  
草を供しつゝ元皇亦映意に入つべしと云  
ふ例のことに執心に語る、お生を氣候に就  
て米との維持一件に旋後キングを頼ま  
ぬ執事しだへ未日難く出づべしと云ふ  
お此の望いが金か、君の思のなる所如不及  
の望を歎へ映意に入つこと云ふ任かせり  
寄上つて送る書也

午後別の道邊者屋の塔、漢の此書、南の四方分  
けをわりの下り、おあつても遠か、冷しく且く  
之と對座し、此の塔から真山、而して目を遊ばせる



この例のト、千々多運び出され砂の山、まゝあ  
る道出し、此前に見れ時、もも、故程進出しし  
のみ、七八年の間、晝夜間、おま、トラウク、搬出  
する砂を捨てる、譯ルから、今い大なる丘陵を  
作る。然と此後、丘陵を築くと、此ら此の位  
金か、この砂、あつても、此の砂、ことを考へ、  
べし見れ。結、此丘陵、どうする、このお、あつても、  
道者、此の土砂を吐く、あつても、相、南の土地を  
買、入、此の土地、あつても、土、地、の、一、杯、  
買、増、を、あつても、と、云、い、ん、て、あ、る、土、砂、の、搬、出、  
は、北、上、高、は、一、年、あ、つ、つ、く、と、云、ふ、か、ら、土、地、の  
買、増、も、こ、こ、を、得、ま、い、が、後、南、の、此、の、丘、陵、を、織、る、者

はじり仕末するのむあうか、熱海の湾頭を埋ま  
せんとも奉り所民の苦情の中止の海とそ  
つてあるか、他の所民と、安海が出来埋まのこ  
すつれら、北土砂を湾頭搬出すへしと云ふ説も  
ある、砂子だが、まの安海の地記を知らるの論は  
こゝを搬出する為り、市中とシ、いさむを引くよ  
り、寧ろ、通見、評、安海、河りの山を崩し、船で  
出を運ぶ方が比較的便利、且つ経費も、い  
まの如く、設金、埋ま、か行、えるとしても、北土砂を動  
かす得まいとあう。北丘陵の上の可き、う、ろく、も、あ  
るから、或の家を建て、る為め、分譲地とする、の  
論もあう、か、彼、の、ぬ、き、高、の、あ、に、家、を、建、て、七、種



この不便があつて、上り下りの段を他つたり相場の便  
宜を心の費用と考へると、丘上の地はいどい  
ちいよ、あ、の、き、恐、く、誰、の、も、精、の、こ、の、せ、ま、い、ひ  
あ、う、う、ま、い、ぬ、部、あ、の、こ、と、を、い、ろ、く、あ、お、い、れ、た、ま、を  
い、流、れ、の、ぬ、の、又、七、層、の、け、れ、一、あ、ま、か、あ、る、と、云、ふ  
と、海、り、出、し、た、の、を、ま、く、と、斯、や、う、な、大、規、模、な、人  
造、丘陵、の、合、う、出、来、の、得、の、こ、の、ま、い、の、ト、ン、子、に  
の、他、の、及、對、側、も、同じ、丘陵、が、出、来、れ、澤、地、か、を  
九、の、八、里、離、れ、た、家、と、あ、つ、て、熱、海、の、如、く、市、中、に  
現、出、し、た、の、と、い、合、を、趣、か、異、つ、て、みる。市、中、に、市  
中、の、斯、や、う、な、こ、の、か、現、い、ぬ、か、ら、る、の、可、成、故、味  
的、な、経、路、を、や、つ、つ、て、熱、海、の、名、本、と、す、る、こ、と、が

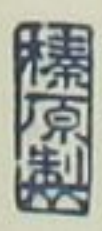
所安である。惣一のしはあらの平地に家をたて  
建つるも、望方北海に只改を添へるものと  
いひ。昔もさういふ言の出来るのい人送擬の中士  
を心のことである。今の身さの既七合目位は  
常ふだけ既に出果てゐる。北上の道と上へ高  
く積み上げて絶軟を中士のやうにするまの  
事だ。えんいあめの面倒があるけんも、目録者  
者の北上砂を置くとゆふと積造る費用を  
えん掛れば出来さうなるのである。えんだけの  
費用が出来さうにして、あつた方針を定めて  
擬中士を心とらんかえんが為め、金を募るの  
ことも出来るであらう。要は早く方針を決す

海防

の在る。城道者七熱海市町も今のまゝ全く  
無事であることが、實に不覚の事である。唯れ無  
事のしこ成行し伝かすことを、他日醜き教養材  
を、所中へ存するのふいふ必しを悔ゆる。目録者の  
ひあらう。勿論擬中士とさするへ、程々の役材  
を安んずる頂上か其々々の如き形をとらさぬか  
るは、後いさういふ、勿論寶永の山の穴地も  
さうけんかさういふ、登山道や谷合の石家のこ  
とにも、備へるは、山林帯と森林帯を  
心づくる。精進湖に擬のへき池は、木の各々を  
ま設けたり、北立波をえり、巻く附の地形  
を巧み又利用して、中士山林帯の爪甲帯に擬す



議論のやうに堅くしつゝの文もあるが、和歌も数ある。  
老練をものしてゐる。養老を弁渡する二章、而  
白の味がある。まことに男子を罵る所に痛快味が  
ある。此の女この二回言の葛集二篇がある。  
幕末から現代にわたる花柳の潤する出版物  
の或るを漏さず花柳とあると云ふのは大かえりなれが  
此の著書の終りよめ流の出版を年代順に掲げ  
てゐる。文七十式、及んでゐるからおもしろ  
い。宛のてゐる。おもしろい。著者の女性研究の  
集一つである。此から一冊と名目をも(さす)後人  
におくものうのと云ふ。回考界の改訂  
のこのてゐるものもさういふことと云ふ。●まじり作



氏らと、此の著集を交へて序をおいて字のせお  
ひ、其序もこの収めである。その著士を此の思ひ  
叫ハリをいさう。朝流の著の流に

作らう

思ひの著士、尊と日侯とこと  
真に申す。流りうんじ此後と  
「男」を意味し、江戸時代のバシ句又  
酒本おの其用例、から目出方  
限りと云ふ。  
とありて、著士に就いてゐる。又表紙裏

養老神聖論者

五七祝儀巻丸山抄巻、此書を献が





とあるは、中世以来の事なり

八月廿一日記

て領内の百姓年貢を未進せしを怒りて割番名主四人を城門にて打首に致されしゆを百姓は近所の他領をも頼み一揆騒動して不時に城廓へ火を放ち攻たて將監とのは自害せられ妻子眷族は皆捕へられなぶり殺にいたされ候趣なり又源三郎とのは今分の處祿八千石にて平澤山の城を相續いたされ候處大名にあるまじき不締の振締多く同五申年四月領内小栗田原江鳥獵に出られ同村百姓六郎左衛門と申すもの農業にて獵場を早く立退不申候とて同人女房並娘兩人共手討にせられ候より領内一同にて府内江御訴訟申上候處源三郎とのは此城を取揚げられ府中江召寄せられ懸命の藏米五百石を給與あり科代として人質預り被申付候趣也。

歌と評論 (八月號)

藤川忠治及び其の一派の短歌雜誌七月號を以て  
滿一週年を迎へて内容益々充實、都下斯界の一權  
威、一部四拾錢(發行所東京市外長崎町地藏堂一  
〇〇八藤川忠治方)

凸凹平版  
美術印刷  
紙器製版

福神堂印刷所

星名謙輝

東京市本郷區森川町五十三  
電話小石川五二二七番(呼)

日昔風を忍ぶが相未人の啼くをり額面十数  
を心る意利つて業随りか殊と拙と足ら  
但此語皆念心のよきを笑ふ

忘枝一約早

閑中日月長

成多ふ説

冷宵如五月

遠帆無味意

招酒話素麻

女而過

漁烟夢多由

井戸枯又又あ

不事ノ美法  
 森多誅正  
 的定皇華香  
 るるノ睡衣清  
 清甫忘機  
 清放  
 琴出侘癖  
 外遊杖席  
 友梅書房  
 書味有餘也

○自分、登山癖があるといふが、先にも夏、冬と登山



といふ癖がある。回春と見れば外遊と併してゐる。近來ハ  
 外圓のアルペニストを倣つて登山の設備が組織的  
 とす。登山者も定々数多くある。多量なところ  
 き、或は登山の目的が、或は感服の出来  
 ぬ。何んか、七五九の登山者の出来方の所を論を  
 回して、その目的を達せんとし、たまに登山者が登  
 山の第一の目的が、或は或るやうな見く、彼等ハ山の  
 征服と云ふ言葉を、用いるが、人間の心、たまに登  
 り得るの意を登つて、ついでに、手荷物、ついでに、互  
 ひ、或は、その動かし、その身命を賭す、たまに、あつ  
 てゐる。恐らく、この外圓の房すの、に倣つて、い、あ  
 らう。アルペニスト、といふ、随分、高、い、意、即ち、一

萬尺位なる高きを織造が架せんとあて、難所にて  
るの所、甚もろく行かざるやうなるのである。尤も  
此山の登攀の目的は人間性を拡張する峻  
嶺を征服するに在りて、誰のとも行き得る所を  
力を費さしむるを愚と考へて、登山織造まじ  
出来てあるのひある。自分連中アルベニストの冒  
険を快とするものあり、峻嶺の征服を壯とし  
るものあり、志がし登山の目的が美の喜びありと  
せん、目的がゆるぎなく単純に過ぎず、他のいろいろの  
スポーツの如く、戦捷勝を争ふことか主と考へて  
唯此目的を達して凱歌を奏するのひある。自  
己の趣味はゆるぎなく素直なものであると思ふ。自分



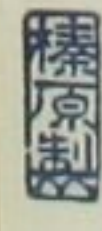
は難攀の峻嶺を征服するのを以て無趣味  
といふ。此の目的を達するに附随して其の往  
るべき所、キャンプする所、遭遇する幾多の  
危険を就して登山に固まるる趣味にあるに  
在り、唯此一志征服の喜びを目的とする結果  
ハ山中の種々の趣味を削却することとなる。又  
おもしろい。自分に登山の目的を達するに純然と  
と思つてある。人の行き難い處を窮めるの  
趣を辨く、尤も大切なることであるが、山を趣味  
的に研究することと忘れたる趣を以てする。山の  
征服者のいづれも登山の苦難を多く語るが  
、然らず所の危う多く無い、尤も征服するに備

事送るのだから、さういふものが登山を興味として  
考へるものからすると、甚だ物足りぬ感がある。折角  
の冒険が漸やく目的を達し、とすべし、去来、丈多  
く他人の知り得るものことも土産に高らして来てお  
しい。要はさういふ研究に氣を入れて貰ふといひたい。ア  
ルペニストの流儀は自然日本の登山家の範とな  
つてゐるやうだが、果してよいか否か。山に  
ハ神秘さるゝもの、浮山もある、決して人力の難し  
さ、ピークのみは神秘が潜んでゐるのといふ。日  
漢人もある、沢湖もある、深林もある、さういふ  
神秘の潜んでゐる。風景美から云へても、此三千  
丈の至峰は勿論侵す可からず、サブリミナーレ

ある一言ふを待たぬが、溪谷美、沢湖美、深林  
美、更らゝ細かく云へば、山岳美、日暮草草美、火  
焔山美、飛瀑美、奇岩美、ありつて、さういふ深  
い山々を、他の低級の山に見難い特別のよみが  
あること、勿論である。私共は、この世界のあつた  
風景美を、遺憾なく研究し、其の趣を、あつた  
其の趣を、あつた、いし、七、初め山の征服と云ふ得る  
のがあつた。僅かに至峰の踏破を以つて征服とい  
ふ、あつた、山神の笑を、持する、あつた、思ふ  
先、前、冒険が主とする、風雪の候、態と登山する  
こと、あつた、研究が主とする、あつた、悪氣候  
を選ん、あつた、身命を賭す、あつた、及、あつた

無難の氣侯を遂にお方が研究の目的を達するに  
あろう。冒険も一種の趣味であるけれども、其の  
又挿入の事、吾等の興みせる所なり（八月  
廿三日記）

○八月廿四日、舟を扱えて四府津より別荘に抵る。益  
田新雲、野澤如洋を伴ひ来る。主人豊酒如洋序  
上書畫を化る。款曉夜に入る如洋快人也。余如洋  
に面するに、初めさういふも、後日新雲如洋を信し  
て小冊を讀み、凡を此人の性行を知り、如洋以前  
の人も新雲と郷實を因り、山水を善くし、亦  
ぬんで馬を畫す、頗る速筆なり。一日千畫を化  
りたることあり、自から豪傑を以つて居り、危地



福の七等、平死して身を全ふす、彼人の傳を讀  
め、半ハ画家の傳にして、半ハ壯士傳なり。彼人  
ハ内地の畫家と力を南するを、慥とくするを、朝  
解支那畫海と遊ひ終、歎来、進出を  
別する、日本畫を以つて、氣を吐く、彼人の画  
林より富める、一歴を、度るき、が、不ろ、南世  
此人の如き性、故ハ吾に稀し。

○國府津の富田半峰、別荘に傳あり、古き祠  
堂あり、名柑を以つて、園を、遊、故、擲する、富田  
の在り、名守りの家のある、地勢、在り、此  
社、大和武尊を祀り、部、と、近、戸、社、と、云ふ  
傳説、尊、山、征、中、愛、人、楊、姬、海、に、投、り、て、死

す、其海<sup>ノ</sup>即ち北附近のお模の海と云ふ、正史の  
尊碓氷<sup>ノ</sup>と娘の入糸を聴き遠かにお模の海  
を望んで悲しみ云ふとあり、信朝の碓氷女と  
りてお模の海を望み云ふ(昔は、史家  
の疑問と云うべく、久米邦武博士は、お模の  
碓氷の地名のあつて思ひあり、此家こそと終  
洞を解き云ふ、お模もすく所と、北海濱所  
の意味を於て尊と因縁なきことあり、而  
て初は、近江の郡ありて此家の地名を云ふ  
歟、戸い海のある所の名を、江に然り神也  
知り亦此に云ふ、アキ又語りてあるべき歟  
○富士山麓の五湖廻りの遊覧旅行も、最に趣味あり

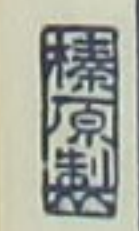
のと云ふ、今の交通の便も開けたれば、何んの西側  
もろく早稲田のグラウンドも此家へあることと云ふ  
行きて見たりと思ひ、未だ黒とて、此家の  
風景、一々として足らん、樹海と名づくる  
所、尤も奇なり、と峰子語り、樹海の高き所  
より、下瞰するに、宛から海上に樹梢を望む、如く  
女の視操に、四つも一、つと、踊る牡鹿と云ふ、  
すべく此家の山、昔し、淡路島の流れる所と云  
ゆる、樹も生へた、と、木、矮身とて、高山植  
物の如く、その名、実、多くの年数を経つ、あ  
る、杉も、他、物、ありて、山、林、業、と、珍しく  
か、く、その、名、も、山中、の、林、業、の、名、の、如く

大祝模に書生して村海と命名を命ずる不  
どの高の親も是よりとの他にあるまじいといふ  
の複製合から、東栗既甚の「回」の複製本が出  
来て配本して来た。前年複製本をいふ所  
の和割坊園の中村登の回をいふ所の市村登  
の回をいふ所が久保の如原と思ひてゐるよ  
うな彼は是れをもさすといふのである。前年の回も  
安田文庫本に據つたか、さういふ久保の  
回が、いふ所が、安田の回をいふ所であつたといふ  
大岩の如原の如く、落筆して鳥有といふとい  
幸ひも複製本の表があつたといふ安田の原  
本の筆彩色を是から取らぬといふ如く、能く

複製本

字にあらわすといふ今も残り、さういふ如くのもの  
出来たといふから、彩色入の此回「複製本」  
といふと天下一画といふ、彩色もよくよくと  
ハ林荒樹氏も「花」である。例の大きき  
廻板の「豊」一枚大のものもある。紙の土佐唐  
紙と習つた儘き目より一枚、印刷して  
ある。絵の誰かの筆にも「い」の如く、大谷不  
倒の上方の絵の如くといふてゐる。  
○日本の動物を書くにまゝの画家がある  
江戸本が実物描といふ名を傳へたこと、内  
かのういふ所、狸仙の猿此の画家、平右  
の画、まゝに比る有るといふてゐる、先悦の好

んい麻を画いてゐる。動物描言の長しれよ  
無いむさうのか馬を描すの名人に似り無の尤  
もたつぐい山楽の馬があら、善村の群馬の  
回をも有るまよものもあつた、多くい或る形式に  
捉のんてあつたやうである。即ち極めを体を得  
たよの金代字といひ、然らざるもの昔し  
から定めんれ形式に則つたよの形式に捉のん  
ず方定をもおんて而る神類をも具する馬の  
畫家の改修に於て古と少との。此處保馬  
と畫するにこそ得るある中津川洋馬會  
一、女席上画する所の馬を乞、亦群馬の  
圖一々幅とも貯るん。流石に千入つたよの



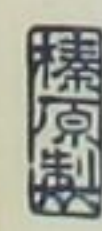
ある、女の出費に弘前生い駿馬の産地むか  
こから自然此人も馬に趣味をもつたよの、自分  
ハ畫村の馬に就て一冊を記して又ハ此女を  
よあの人の著か縦横ひあるからお南よ出来  
てゐるが、而し缺點、流る少くさうといふと  
おれ。軍馬をいハ多く流世伶々方おれて指の  
人物ハ身持を重き、馬が描かぬ馬といハよ  
可減書いたよのが多いはあつた、流るやの馬  
ハ姿態や其の流躍の状をよをよと書くこ  
とい恐くく馬を描する所の困難むあつた  
いかと私の感ハ此のむさうな漢物とさうだ。如洋  
と酒次次と交へて可笑く思ふ所のハ如洋が



支那旅行に利する家と食を包圍せんと其れ  
ことを詠しれが如洋の苦心して之れを解るる  
法を案しれ、其れ馬に駢つて旅するが如  
もよ、其馬が人を乗せし走つたのを追捕  
するも其れを人食もやらざる云ふれ、此れを  
無心の詠があらはれ、自分此後七夫強馬を  
一かついと一夫一馬。

八月廿五日記

○四府津、行く車中無聊に地を眺む、其れをステ  
ーシコンを来れ娘が抱きてみれ。婦人サロンを借り  
て同性愛者(渡回)を詠讀しれ。其の言ふこ  
とが公平と感しれ。其の同性愛者も不公平と批判  
を言けてみることあり。いろいろの人に書かれ、其れ多



くいふいふ人のよきある。常事者の別を、常事者  
以外のこと、之れを不倫と、之れを不自然と、之れを汚  
らうといふ、此れを愛し、此れを愛し、此れを愛し、  
くも。其れから其れを者も其れを恥し、くも、  
行つてみるから、一向目と主れ。日本の法律も全  
く其れを度外に置いて放任してある。佛事  
業西洋の補給を始の多くの回りの法律を  
以つて其れをみる、日本が之れを大目に見て  
ある、日本は偉いと褒め、其れを誇つたり、其れ  
のちあるが、其れを研究せん、ソット其れを  
して置く、其れをきく、其れを、其れを、  
其れを、其れを、其れを、其れを、其れを、其れを、

て凡紀のなほいふの如し。研究の結果悪し  
く思ふことかよいことなるべし。之れを故吹  
す。今日の凡紀の取捨を任するもの差  
く社会問題とよぬ。一板に男色は教團  
時代の事だ。宗教の繁栄時代の事だ。とすべし。過  
去の事のごとく考へて、意を此處に注かざるやうな  
見こるが、同性愛ハ單に男色の又かまひ、女子の同  
性愛も、男色の感入か地方  
の事あることを忘るべし。男色の感入か地方  
九州の某々々地東海北の某々地  
にもあつた。多きが進々と  
つてきかから、凡紀の爲め、一層安心させしかも知  
らん。今日の愛慾性慾の病者は無んが同性愛



無のやうな思ふ人もあつた。性慾と解  
き、同性愛の全の体も同性愛と愛慾性慾  
と一板見ざるべきや否やが問題である。中々  
愛慾性慾と又做さるべきものもある。おま  
か、同性の互ひな長ぶの志意を止まつて性慾  
関係の互ひのものもある。友情が進んが志意に入  
るもの、人情の自然とも又さるべきものもある。  
愛慾性慾とさるもの、無記の沙汰である。  
斯物ありの女子と性慾の男女愛と弟子の間、  
り、同窓会も性慾の判別をのせ、同士の問や尼  
母寺の女僧問も性慾である。男子も在りて同窓会  
殊に高等學校時代の多くある。或ハスボー

の仲間の間にもある。女子は若くは男子よりとも西性  
主義が性道関係より不道徳といふ無倫である。おもしろ  
い如く友愛関係の如きものも決して無いわけでもない。昔  
の武士は口は忠告の関係を契り兄弟約  
束として死生を共にし、いふがあらうといふしやうに今の  
世の間の如き同じやうな別致を契つたものがある。その  
ハ年長者が年少者を相手にするものと又思ふ  
の皮相の親戚の年や若きもの間も優劣のま  
やうな別致関係も決して少くなくあることを考へ  
て注意せねばならぬ。甘口なる者にしてはさういふ  
別致の理解のまゝにして単純に不良青年が純  
良の幼年者と一死を共にするといふ間の如きこと



あるもの、同窓関係の如きもの程の優劣のまゝの別致  
と友誼のまゝの性道関係の進歩の如きものがある。斯くも  
合はぬ下や上や相手の一方に他を惹きつけざるものがある  
かあるのが通例だと流石な者があつてゐる。事実は  
ある。亦さういふ法は、双方互ひにお扶けし合  
つて進み、又ポーツマンといふは、場を立つて成り  
立つといふことも事實であるから、一概に同性愛  
をこころいふこともあつてゐる。昔は武士  
の別致の交りもさういふこととして奨励した。  
これらも併せていふ。ことを思ふと友誼の如き  
事柄も相扶けし合つて進歩の術を成す。成す  
ることも、同窓関係を成す。思ふ。一時の性道  
の方便とす。

同利を

を満す為め、男娼を弄ぶことの陋習を非とも  
 お性愛と云く、皆曰しよ、**純**のやうな**純**  
 とすの、淺薄の誤りを免かぬ。

男色問題に於て不可解のことはいくらもある。昔も  
 アリテローウのよふお怒を考へるさうや目うし思ひん  
 パウレローウのよふお怒の犧牲があるか受えらん  
 てものが實際にさううくせんさうのむさう。パウレ  
 ローウのよふことを快とするよふおいくらもある。こ  
 ーガリーの如き豪傑が男をも好人びと云ふて  
 もせよか不思議思はんさういふおんが、パウレ  
 ローウのよふことを**快**と云ふよふおいぬ、**感**  
 實際年々若く年少を死んでアリテローウのよふさう。



例が洋山にある。さてパウレローウと云ふことをまじ  
 お心理作用のせよ、**快**と云ふは、**快**と云ふは、**快**  
 ウの快感を覚ゆることのみさう。パウレローウも快感  
 を覚ゆることのみさうである。上野東叡山の悦の大悦  
 天悦の言ふが、行いん二人悦ぶの大悦は、**悦**  
 男色を悦ぶ。二人悦ぶのが男女の交接である  
 の、悦つておんか、**悦**の共にお男をもとて、**悦**  
 あるか、**悦**の。志意のさうの**悦**を、**悦**  
 志意関係の悦は、天悦のおんか、**悦**  
 ツレローウが快感を覚ゆることのみさう、**悦**  
 とき氣ふとさう、**悦**の終るおんか、**悦**  
 悦ぶおんか、**悦**の、**悦**の**悦**と云ふおんか、**悦**

か

みる。

外人も自國の法律の制裁が出來ることか日本  
に出來ると喜んびめる向かあり親にそんな目  
し男婦があつて日を定めて新と濱尾のま  
たよのゆゑある。六夜し後一のあうまこも  
書りぬとある。まんい公園の人並き所と洋人  
巡査を呼びかけ、ケイカンとそあからりひり  
くと千五圓の紙幣を振りおろす体態  
を、新ケイカシハ敬を習ひるゝ鶴  
とそいふもの、鶴を去つれとまよわさ  
ふまもあぬとある。

或の同性愛とそあつと見し鶴を連想し

鶴

或の同性愛の鶴のことに、鶴はあ  
こか、まのいひと誤つてある。女子白士の向の鶴  
女は、あつて、男子白士の向の鶴女は、  
くドローシグがある、あ股の向、東橋衝動す  
る、(六)女子、鶴の行ふこともある。入浴  
博士の娘、白あつて七十程の老人が二人妻を慕  
へ、あつて、鶴の具、供しあつて、  
へしれとそあから、自人のまのあつて、  
人の興つれとそあつて、とそあつて、  
向の同性愛、二十自人のあつて、  
笑福亭に、二十三十まの女中と四十洋の女中  
み、まの同性愛、毎夜日念して相抱して

獲ふと云ふは。甲許りのせうよく良人と云ひ、  
●かほりもろくか、交接しを快味と感し、  
先けは。今一ツの例、有名なる日本橋の法三  
の未亡人が下谷の某妓、志慕して頻る料  
亭をも掛け、店から法三をも招きて慰  
をるは、是れ、こめく、酒りかけ、出れい  
かまひ、終る成り、これ、  
果し、  
えが一方、  
か、  
この由文とる、  
段かある。早稲田の

ハ教の子を愛し、  
病あり、  
生か下段の、  
人の、  
ましめん、  
る、志傳が、  
例がある。随人、  
問の、  
を、  
を聞、  
○岩船、  
村三、

昔に好いこともあつたが、前月二十日の早朝、  
所々目立探検にがぬりである。是れ就ち板敷  
を書くと此打屋の三十戸を、堂々かやぶ  
きを板敷敷きしめて、任民の昔風の服仕を  
してゐたのが、北背丈か育てく目立昇立かよく教  
つて、そこかし大客人の氣が、かたうつてあつた  
又、應接するに、か下客も優雅に板敷に指先を  
ついで、頭首を板敷につけて、禮をすする。数年  
前もか、か下片足を、主膝をし、これと、か下客  
上の上着連の、か、儀書、か、能、か、見、か、や、か、す、  
のか、あ、か、と、か、か、か、か、か、か、か、か、か、か、  
か、か、か、か、か、か、か、か、か、か、か、か、か、か、



従つて、か、湯の、か、ひ、か、か、あ、か、あ、か、か、か、  
云ふれとある。狩場へ行くと、か、か、か、か、か、  
お服従とある。文様か、か、か、か、か、か、か、  
制と共同動也とある。冬、か、か、か、か、か、  
を、目、深、か、か、か、か、か、か、か、か、か、  
胴着、か、か、か、か、か、か、か、か、か、か、  
て、見、か、か、か、か、か、か、か、か、か、か、  
伍を、か、か、か、か、か、か、か、か、か、か、  
ん、か、か、か、か、か、か、か、か、か、か、  
を、か、か、か、か、か、か、か、か、か、か、  
を、か、か、か、か、か、か、か、か、か、か、  
め、か、か、か、か、か、か、か、か、か、か、

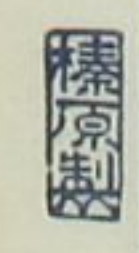
是が或重子同じに定統して後りてあるが、こゝに「是」  
 等のちつ家が動くをいふ族結婚の故亦か現ハ  
 してあるいと云ふ。村のいハ池高橋伊豆の三  
 姓のけである。ハ池ハ則ち村の長大納言ハ池大  
 炊々平朝臣盛實の三十七代目であるといふ  
 ○此頃内を扱へば訪ふれ時、玄関と茶の  
 間の間に筑紫麻風が立つておれ。是ハ丈の低  
 い五曲があつたが、玄関の末訪女から茶の向  
 の見へすこのを麻風と多くは骨つきの扇  
 子を麻風に後びつけしあつたが、あまの面白  
 く感じられた扇も夏のものもあるから浦和してあ  
 る。扇子、いろくの繪や書があるのが張り交

せ扇ののやうにも見へた。こゝに就て思ひ出し  
 たりハ、博生老師の意匠が、昔し筑  
 紫風の武つかのあまの扇をかけたるを  
 いろくと花を生けて、涼味をそとる玉扇  
 をしこれとびある。茶の湯式に派手な花を  
 花を投げ入れ、おろつから浦和をいふと、生け  
 ぬんばありの故もあるが、まを巻く扱へば、  
 扱へば麻味になる。

○西京の友縁と加賀友縁と（折書）があるが、  
 道の色人柿瀬の年ハまふから、その主たる花  
 の敷をまへて見ると、京の色紙が清淡二種  
 ころつてあるのが特色がある。例ハ紅色を用へ



るこゝんは流いもと不のしれやうる萬の田しを  
が重疊する。此が加賀友禊の清浄三三七  
ひあることが相違ひあるを鑑別する。此の  
此の作通特徴をいふは、ぬらぬらと云ふれ。  
田に友禊の二風が重なり依つて三々する。何れ  
あうらうか或は方角が関係する。あうらうか  
染る。どハ京に染めていゝるも、裏面、徹する  
いの江に丈ハ裏に徹する。裏面が又、此の  
の関係又依つて、いゝるも、梅瀬の法である。紙  
のこととも、あつて非常の関係がある。土佐が奉書  
と漏へても、硬くうらうら、紙削のことと、柔か  
ふのくりしよを濡せしめらる。



○酒造の生命ともいふべきは、~~水~~水である。自  
身を得せんと白酒と醸すことが出来ず、いゝ勿論  
がある。灘、あうらうの酒造家、良井を得んと  
長く苦辛して、実験から得られぬ秘訣が傳  
つてゐる。先づ井を数千人とする。おもしろい  
を定め、まゝと清き、水をいくつか伏せ、一  
夜を寝し換すと、あうらうの蒸気の気が少しも  
あうらうとあうらう、汗が滲み、あうらうのやうに  
あうらうとあうらう、あうらうの清くあうらうの  
つて、あうらう蒸気のまゝのあうらうの位地を  
ん心あうらう良井を得るといふ。尚ほ  
他の一法ハ、夜分四五のハンギリ、あうらうを盛つて

およそ井と数金人とするに違ひ置いて静かに  
検するに、あること大空の星が如く映するの  
と映じるとある、その星の映するハシギリ  
の空を数金人の心くす良井を得ること、僅  
かに尺寸の相違ひが成りしむいことあると云  
いんてある。

○大河内正敏元帝を大徳の所有者である、その熱  
心なる研究は、何れも此を示唆を抜く智識が  
ある。内務の研究を以て大家と云ふを許せんと  
みるに、誰れも固執の事、此の氏が砲弾の  
射の速度を測定して、獨逸の甲人を教つ  
か、此の事、若名の流しであつて、母氏の心こ

徳島製

依り獨りし、動章と共に、此位を傳し得也。  
その測定は、精確であること、砲弾が射の速  
さを撮影した字、其の據つて、証せんとする  
氏の測定の方法、その向ひあるから、知り得る  
いか、注又通る例、この砲弾が鐵板に達し、利  
那、或は貫る、の刹那、或は鐵板に達し、余  
中をも速く、而中決して誤らざる、此の測  
定の物、確に証せんとする、其の事、

○若書をテ、テ、テ、トす、こと、西洋、古く  
から行ひん、今も、此の、事、に、倣つて、日本、此の、誰  
れ、捧くと、特記し、以、よ、か、ある。自分、い、ま、さ、い、委、し、く  
讀、べ、て、又、暇、か、ま、へ、か、日、本、ま、た、う、く、か、り、獨、り、

してあるに思ふ。是れ「捧げると」デテケートと  
評し比形式に異つてゐる。誰れの為めか  
云ふことあるにやうと思ふ。勿論タイトとペー  
に書くこと西洋模倣か、是れのこと昔し無い  
しは、或は君侯の為め或は父母の為め、或は子供  
の為めか、或は何かいふ事ありしと思ふ。是れ  
序や例言を以て及し或は何か書かすに在  
つてもその推定を極むるにやうがある。是れ其  
ハ自然の情理から生ずることか、書物を著し比動  
機を擇ばるといふくの原因があつて、著者比動  
機を以てある。君公の諫を納むるやうな文も君に捧  
けたる文と相違する。是れ其の志を以て研究する  
べき

として漸く其の悲み、其の研究を完成し、若し  
るもの何んともありし父に捧げる性徳のよきである。  
母種々の教訓を書き残し、比のよきもの動機を  
子供の為めか、或は門人の為めか、比のよきものが  
是れか一般の教訓書と云つてゐるものが、少くも  
い。但し著者の人の福ぬかあつて、主流は一般の漢の  
もの資格がある本も、児孫の為めか、書いて  
ゐるものもあるから、一概に是れな文字を挿入しては  
ない。其の實體から判断すると其の否らると否  
とが、是れ。全体デテケート捧げると云ふ言辭は、  
敬語かあるか、私に日本に誰れの為、彼れの為と云  
ふことと、輕い意味を取り比い。是れとして捧げる目

的にさきよくひきあつてゆく。謝恩一語法のよ  
びることを理解して受らんといふ謝恩の捧  
けのうまい皮肉さがある。ある人を敬愛醒せんとい  
ふその人の妄想を打破せんといふ目的の特異  
な謝恩とか敬愛視察監督をいふ捧くと書くといふ  
人への誤解を避けるの趣意から出てくる。或は懺悔  
の告白を敬愛するの誤解を避ける。或は謝恩の  
目録として著す時とて多くの名を現はして捧く  
と云ふやうなことがある。いふ昔に於て謝恩の爲め  
かゝるいふ。亦愛の詩をいふや侍婦の霊に捧  
けたりするものも決して謝恩の爲めである。謝恩の  
爲めとする例はちよと多くあるから別々である。

謝恩

おが最中直接するもの自家の研究を助ければ人々  
謝恩的に捧けよう。最も自知である。その研究を  
を助ければと云ふのである。材料を供給すれば  
のちあるやうし。或は刻書を出してくれば人もある  
うし。或は著述を出すやうし。又頭脳を開拓してくれば  
のを恩師のお陰とするものもある。此等はい  
る著述の出発点に直接の関係がある。それ無  
りせば出産が無いかも知れない。あるから報  
恩的にその産物を捧げよう。自然の情理に  
ある。尚ほ吉報をいふ直接恩恵を受ける  
いふ種々の恩恵を受ければ人があつて、その酬へ  
んとしるも酬へやうが無いのか。若書を献して

せめりもの物と書(き)のこともある。母や師や友人との  
の事蹟(しじやく)を録(ろく)すること、事(こと)性(せい)質(質)のあつた何  
んの断(つぎ)りかゝることも、その等(ら)故人(こじん)の事(こと)に捧(たま)げらる  
る相違(さむだひ)なき。えんらのことが偽(いつはり)らるる人間の物(もの)  
らあるとまんば決(けつ)してあつたことはいらぬ。志(こころ)かし往(むか)  
時(とき)めく人や名(な)都(みやこ)のある人に献(けん)すと銘(めい)々(々)しく宣(のたま)  
侍(さむらい)するもの。廻(めぐ)りも甚(こ)しい。次の文(ぶん)蔵(ぞう)春秋(しゅう)  
杉森(すぎのもり)春次(はるぢ)氏の(し)デテケケしてヨシハ私(ひそ)事(こと)もある  
公(こう)けり刑(けい)行(こう)するものと私(ひそ)事(こと)と扶(たす)むの(の)護(ご)者(しや)を侮(あは)れ  
す。よんどと痛(いた)撃(げ)きしてみるのも必(かな)らず竟(ついに)献(けん)意(い)か澄(さ)  
用(もち)せあることを懐(なつ)慨(がい)し以(もつ)て約(やく)りの説(せつ)ひあつた

徳川

自分とつては存(ぞん)へんが、若(わか)者が著(しやく)述(しゆつ)の動(どう)機(けい)と書(か)  
いどう誰(たれ)んの為(ため)か、以(もつ)ての(の)如(ごと)く記(き)してよるんは決(けつ)  
して後(ご)者を侮(あは)辱(じやく)しれよあびるんと思(おも)ふ。謝(しゃ)恩(いん)  
私(ひそ)事(こと)といふくと、東(とう)書(しよ)の生(なま)れ、若(わか)者(しやく)著(しやく)述(しゆつ)の大事(だいじ)な記(き)  
録(ろく)がある。若(わか)者(しやく)著(しやく)述(しゆつ)も誰(たれ)んか所(ところ)かあ  
ることを書(か)いてあつた。そしとそんか若(わか)者(しやく)著(しやく)述(しゆつ)の大切(たいせつ)  
道(みち)徳(とく)とてあつた。唯(ただ)これ訓(くん)題(だい)の(の)キリトルへーじ  
と、録(ろく)くしく書(か)いどう、まか宣(のたま)傳(でん)の厭(いと)味(あじ)を合(あ)  
人(ひと)の(の)事(こと)か、いけいけいといふと、まか宣(のたま)傳(でん)の厭(いと)味(あじ)を合(あ)  
譯(やく)せらるる。献(けん)意(い)の(の)事(こと)か、いけいけいといふと、まか宣(のたま)傳(でん)の厭(いと)味(あじ)を合(あ)  
杉森(すぎのもり)氏(し)の(の)物(もの)か、自分(じぶん)も之(これ)を非(ひ)とすもの  
ある。

八月廿六日記

○枕の装し方にさまざまあるが、船形といふのが、  
よく工風をえたとよぶ。左右に款側する不<sup>レ</sup>ぬが、あ  
ら、但し、高さや款を寸法のむねで不愉快を感ずるよ  
かあるのむ、僅うの寸法のもむで不愉快を感ずるよ  
か。注より枕の装飾もいろいろあるを、金む、模の形  
を時給する<sup>レ</sup>ことも行はれたが、まんとらむ、枕の古  
歌をむを款し、ちりして、<sup>レ</sup>時給する<sup>レ</sup>方が  
優し味もある、氣が利いである。

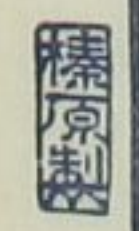
○書簡のそ人に送り立てるな、翰と需  
ある工風といふ、いろくの法がある、むも考も  
る行はれたもの、花信の文言の毎行、<sup>レ</sup>文句  
を作り、直ちまんとらむ<sup>レ</sup>こと書かせ<sup>レ</sup>ることが

漢字

詞法とてんてみだ。業、無性の人、打掃かする<sup>レ</sup>こと  
と書かせる<sup>レ</sup>ま、こん<sup>レ</sup>ま、若く、よ、無の、珠、<sup>レ</sup>故、<sup>レ</sup>條  
の、意、見、あ、ま、ら、む、を、提、し、<sup>レ</sup>て、<sup>レ</sup>石、の、決、裁、を、需、め  
る、体、え、又、の、種、々、の、質、別、を、羅、別、<sup>レ</sup>て、<sup>レ</sup>其、の、解、差  
を、求、め、<sup>レ</sup>時、を、む、<sup>レ</sup>行、詞、を、ゆ、け、<sup>レ</sup>ま、<sup>レ</sup>こ、<sup>レ</sup>へ、回、答  
を、書、か、せ、<sup>レ</sup>こ、<sup>レ</sup>が、最、も、便、利、<sup>レ</sup>な、<sup>レ</sup>あ、<sup>レ</sup>る、。尚、ほ、他、の、<sup>レ</sup>  
法、<sup>レ</sup>書、簡、の、終、尾、に、<sup>レ</sup>お、た、<sup>レ</sup>あ、<sup>レ</sup>の、故、白、を、取、<sup>レ</sup>す、<sup>レ</sup>こ  
と、<sup>レ</sup>あ、<sup>レ</sup>る、。こ、<sup>レ</sup>ん、<sup>レ</sup>の、<sup>レ</sup>程、<sup>レ</sup>た、<sup>レ</sup>ら、<sup>レ</sup>く、<sup>レ</sup>あ、<sup>レ</sup>る、<sup>レ</sup>行、<sup>レ</sup>い、<sup>レ</sup>て、<sup>レ</sup>著、<sup>レ</sup>る、<sup>レ</sup>集、<sup>レ</sup>  
又、<sup>レ</sup>其、<sup>レ</sup>例、<sup>レ</sup>が、<sup>レ</sup>見、<sup>レ</sup>く、<sup>レ</sup>、<sup>レ</sup>古、<sup>レ</sup>法、<sup>レ</sup>の、<sup>レ</sup>亦、<sup>レ</sup>能、<sup>レ</sup>著、<sup>レ</sup>、<sup>レ</sup>集、<sup>レ</sup>性、<sup>レ</sup>書、<sup>レ</sup>集、<sup>レ</sup>  
る、<sup>レ</sup>む、<sup>レ</sup>も、<sup>レ</sup>又、<sup>レ</sup>く、<sup>レ</sup>と、<sup>レ</sup>あ、<sup>レ</sup>る、。ま、<sup>レ</sup>又、<sup>レ</sup>故、<sup>レ</sup>白、<sup>レ</sup>の、<sup>レ</sup>字、<sup>レ</sup>「<sup>レ</sup>漢、<sup>レ</sup>字、<sup>レ</sup>」  
の、<sup>レ</sup>二、<sup>レ</sup>字、<sup>レ</sup>を、<sup>レ</sup>考、<sup>レ</sup>く、<sup>レ</sup>こ、<sup>レ</sup>が、<sup>レ</sup>例、<sup>レ</sup>と、<sup>レ</sup>う、<sup>レ</sup>て、<sup>レ</sup>あ、<sup>レ</sup>る、が、<sup>レ</sup>流、<sup>レ</sup>字、<sup>レ</sup>本、<sup>レ</sup>の、<sup>レ</sup>  
亦、<sup>レ</sup>能、<sup>レ</sup>著、<sup>レ</sup>、<sup>レ</sup>集、<sup>レ</sup>性、<sup>レ</sup>書、<sup>レ</sup>集、<sup>レ</sup>と、<sup>レ</sup>あ、<sup>レ</sup>る、<sup>レ</sup>け、<sup>レ</sup>ん、<sup>レ</sup>と、<sup>レ</sup>も、<sup>レ</sup>あ、<sup>レ</sup>る、



の外圓、旅立つ人があつて、中央ステーションに家族の友人のじかが多く見送つた。旅立つ人の知り朋友との肩接、忙かしく、家族に對する態度が冷淡に見へた。傍觀してみれば、外圓人夫婦が不審な顔をして群衆のあつた妻もあつた母もあつた。見んを全く謝却しておつたの、比と云ふは、如何なる外圓人から見れば冷淡も見くふてあつた。日本の禮習慣わが家をもある時、別れを惜むこと、勿論か、前より別れを惜む女々しい態度を辭けつたのが、例である。西洋では、人中の構はず、夫婦接吻する。見ん較べると、例より冷淡のやうであるが、見ん形式の上のこと、日本でも夫も、母子も、別れを惜



しあつた。決して厚薄のある譯は、その車、汽車の時、車窓に依り、母も、然るごとく、旅立つ人、對し、車の動く時、静かに、礼する。其或分秒の間に、双方、平々、其の胸中、往來する感、億ハ千萬、無常を、あつて、言へぬ、言へぬ、後、痛切味がある。比、外圓の習慣、情が迫ると、露骨に、極致のうらむをやるが、見ん、既、親が、無、日本の習慣、ま、ひとり、離れの時、心、あつた、節、款と存すること、が多い、意、う、どの、流、術、も、見、れ、也、西洋人、何から、何を、書き、お、さ、さ、け、ん、が、じ、ま、さ、り、日本、心、あつた、者、著、し、ん、の、悲、怨、の、跋、地、を、存、す、ること、が、一、特、徴、と、さ、う、も、み、る、一、極、の、白、紙、に、終



ることを考いて、ぬき書きし添くが地の北は里集も全死  
者くか、えんが却つて金甘書があつてその西  
の何れも極端な事を行くか金甘書が甚だ  
しい。先角日本の習俗が西洋人の理解し難  
いことか多しある。どんな説きか外して西洋  
人の理解し得ることをより内列奉的の者  
いて元らうと思つてゐる。


ロスメリズムやマニヤの事を自分委しく調べ  
たことも多い。その就に特別の知識があつてけ  
ハるへが北次感いしことかある。文藝春秋社  
で死に面しに體檢社法分と云ふを催し陸軍  
少将の梅井忠造氏の橋大隊の軍務の由り

陸軍

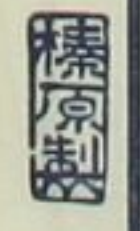
るもの軍人もまゝに出席して所懐を語つた。その  
著記を漢しひ見ると、その人も戦場に出ると、  
砲鏡而射を危険とも思はうと云ふ  
てある。その論者其人も特別の勇略があ  
るかとも思はう。どうも死ぬかと思つて捨  
身と輕んぶるかとも思はう。軍紀が厳しく  
せん制せんとすると思はう。橋本の死を決して  
みるからの覚悟が平死なら、その死とも思は  
う。戦地を離れてゐるものから考へると、よく七  
月、危険を無視し得るものとは疑が生じて  
来る。将官ハ平素の修養もあつたか、として、  
り、修養もあつたか、危険を無視する

ある人の何人の故であるか、普通俗に解して  
戦場に出ると気が変るとその上気がさるとも  
ある、真奮するとも云ふ。これ後言ひ候ひ  
あるが、精神上の変化を来すことが確かに一原  
因である。心理を考へて、これ等もどう解  
するか、知んか、自合の心しくメスマリズムに罹るの  
で、あると思ふ。精神が作動してある一階に  
集注し、同時に他の精神が空になる為めに  
思ひ、銃創を負ふる為所を外るんが、氣も  
留めず、苦痛も感へない。後、自身体を認め  
て見ると、十数人の銃弾を穿たぬ、此の實例  
がある。銃創を氣にもしらない、甚道奮闘

精神論

こののを一概に勇と云ふか、斯う勇氣も實ハ  
メスマリズムの休業ひあるまいか。勿論軍隊的  
のテレプリム祖國に對する愛國心も、切實心  
をも、手傳つて、メスマリズムに罹るのでもあろう。  
亦戦場へ漲る敵愾心ハ、會得大なるマニヤを  
生ずることもある。精神一到何事ハ  
成らざらん、そのが、精神をよき操縦するといふ、メ  
スマリズムも、えん、神の指導する在るものと云へ得  
やう。戦場へ歸まるのにも祖國の難三直面して、殉  
國の心も、動も、愛子を戦場へ送ること、或は、光榮  
と、或は、名譽を、然らざるも、思愛を捨てること  
も、躊躇せざる、 なるもの、一般に、澎湃

忠君愛國のマニヤな羅のよは、メスメリスムに罹る  
よと解て孤心さるゝ。切支丹殉教者の壮烈の死  
の如き熱烈な家あ心こ燃へて、死を望まらうと志すは  
キ、一少年が島原城の大衆を揮掃し、此ときも  
矢張りメスメリスムに罹つて解す。其の愛する  
ひは、西洋の歴史が一七世紀の神の  
如き流動を、此ときも矢張りメスメリスムに  
罹つて一例に過ぎぬ。本人自身も、さへて見ても何れ  
然るか自からても、さうさうの心ある。俗に云く、孤は  
慙かれば、やうさるゝの心。メスメリスムハ多く革命  
を以て現れる。よいことゝ為るゝ慙く孤は、欲  
せぬ心さるゝの、要に國民性と國民教育の現文



であるから、清しき愛の無いらぬ、心さるゝメスメリ  
スムは起り得る。西洋人が日本の武勇の淵源を  
いふに、研究するもの、的とあらうゝの、無理はな  
い。西洋人は、説いて分らうゝの、國民性の一つである  
の。メスメリスムの、少くも現文、誰か知らぬ、且つ  
言ふが、あまの、大ききメスメリスム、就て云はぬ。忠義  
愛國の精神の、理屈ひらうゝ、大なるメスメリスムは  
あり、私いふは、い。  
大切な、私いふは、い。  
八月廿八日記

④

○未だか、空想の酒を、栞一、此の、八十九年、廿年、一月  
十九日、其の、から、施行せん、形式、さるゝ、みる、  
日、乃ち、施行、後、改、二十年、を、経、て、みる

か、若、役、の、み、つ、果、ハ、ハ、そ、か、あ、ら、あ、七、日、

の比較實施後の情況を要しと述べた。その結果、  
自分も未開地の人々を思ふ毎に父へて見ると、  
いつ七時、味の差を得る。さういふ時、保  
つて居る地士は江金の之の酒とさう書を獲  
て後、初めて其の實情を知り得た。以下その  
比に據つて、省革的の自分の文が有る。

世界の諸國は禁酒令が布かれ、例へば、  
嘗て行はれた例は、米國の如き大なる國は、  
先が實施せられた十年を以て、さういふ  
る高の飲のやうであるが、實際を變へて見ると、  
外面こそ禁酒が行はれてゐるが、内面は行はれて  
ゐない。さういふ實情である。さういふ故の

禁酒令

と云ふ、亞米利加の聯邦である。さういふ故の  
之を行ふ。さういふ。市地が、さういふ。別と意  
法に、其の施行法が、無なる。さういふ。譯比が、も  
の、その所は、禁酒令が行はる。さういふ。さういふ  
行はれた酒も飲め、さういふ。さういふ。中央へ、さういふ  
も出来る。さういふ。施行法の、さういふ。州を、さういふ  
さういふ。物、初め、さういふ。施行法、さういふ。ニ、ユ、  
ヨー、リ、  
州、さういふ。ヤ、モ、ニ、夕、サ、州、一旦、施行法、さういふ。比、後、  
癩、比、コ、ニ、ナ、澤、比、決、と、亞、米、利、加、全、土、に、禁、酒、  
令、が、行、は、れ、て、ゐ、る、譯、比、さういふ  
禁酒令の布かれ、日、或、時、刻、の、最、後、の、時、刻、  
の、酒、場、の、騒、ぎ、は、偉、か、つ、比、と、さういふ。好、酒、家、が、殺

利に寄るが現に此の若者に求めあつてもその  
の具を感せしめる。最初の因こもいろくの業  
を運ぶしに。或の薬料と云ふを名として其  
家ニ就て家方衆人を増つて其出店からアルコー  
ルを買うやうなことをやつた。そこが政府の送附  
に對し、あるハンセント以上のアルコール合を念む  
業を用してはならぬ。或の酒目廿九の以内は酒  
を含有する菓物の家方衆人を百も以上増してハ  
るゝといふこと、まふ禁酒令を出した。ワヰスキーを  
を内々に求めた面々の取締に去靴の中を潜めれば  
追々の薄べりの容無か出来て内ボケツトは潜ま  
し得るやうなうた。但し本部組織の料理店が

禁酒令

出来て、まゝに今更夫があの酒を飲むやうな  
工夫をして。あゝ然々の家庭で葡萄酒のいとき  
西洋の醜し得る酒を内々送ることゝもする  
比。多量之人は危険を犯して酒を飲ぶこと勿  
論だが、少量の利きのうの猛烈の酒を自ら其  
ふことゝする。追々のあい不衛生の酒が行はれ  
来れ。各輸入もの論成免れ行はれ、其の会社は二万若  
田許の資本を以てはせしめ、要塞的の事務所  
を修り、運送する船の機関銃が備へてあつて、  
数ヶ月前に臨検をせしめても、機関銃と銃射するま  
らず、其の多くは銃の機関銃の銃射するま  
小銃が實地に赴いてみる。沖合に密輸の酒



と益々以四に救すも金が多くなり、殊に米四の  
船に乗つて酒を飲めようのから外四船を遣へ  
て乗る為には、五米利加之船舶が失ふ所也決し  
て少くも三のと云ふのんてある。

爪儀衛生を以ての上から見れば、家庭は女をせよ  
の關係上とんを酒を口うし、女や子供も  
酒との縁故が生じれば、とも注意せねばならぬ  
貧民や労働者が過激な酒を飲む結果  
として死亡率が激進し、と云ふのである。此方  
が此の禁酒令の情案としてあるのを見  
る。

一 改革を以てせむ

逆傍、泥酔者が少くもさう  
労働者の家庭に、確かすもさう  
酒の消費量が少くもさう

一 悪結果の如く

去年の飲酒が増加して  
暴飲者の増加して  
悪酒に依つて死亡率が増加して

酒の消費量の少くもさうに、  
酒のけい家庭の悪化が出来、  
七五の強、と云ふのである。カリフォルニア  
紐育に移される葡萄酒の原料は六千に及ぶから

俄然六萬に貨車とさう更ら七萬五千に貨車  
とさうやうな増へてきたら乃ち這育のけに移入る量  
はけとも六十萬名の葡萄酒が出来て譯しはあま  
る御禁酒政果を及くしてやん狼狽しはの葡萄酒  
の産地カリフォルニアにあらはのか、實施の成つ  
て見ると亦も幸を得たよりの却つてカオトあつ  
といぬることである。

養生の飲酒が増加しは原因は先除を胃と法様  
を滑ることと興味を感し、さう冒險をやらぬ  
が豪傑のさういふの如き所があるのを彼等が飲  
酒家の激増しはに事実はある。悪酒の考の  
死に率の増しはのもる實は前年より比すると二



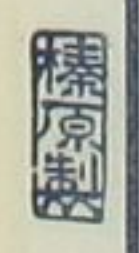
割五分増し、十年間の悪酒の死に数が三萬三  
千人と算せんとある。尚ほ禁酒令のせよんは酒片  
を喫することか途々減りするの如き説があること  
あるともある。

フリーグアーとスミスが大統領を執りしは禁酒  
特許を標榜しはフリーグアーが勝つたのを又し  
禁酒特許は成家の之れを以てと輿論の帰趨  
を云々するけれども、實際はフリーグアーは選んで  
費が多くなりあつたから勝つたといふ説がある。  
どうしてフリーグアーは多く金を心り得たといふ  
と、是は表裏入者密腹生者葡萄酒栽培者  
から賂つた金と皮肉をそのしめるものもある。



禁酒の為め、後等かぬる利益に於いては  
かの半面を譲るといふのである。

米田に於ける密輸密造の事については  
差押へん比ち八千九百廿三年の十二万四千個から  
廿五年まで十三万五千個に上り、又密造密輸の酒  
は差押へん比ちが千九百廿三年より山井スキー  
類一萬千石、ビール類十二萬石、葡萄酒類二十  
二萬七千石とあり比ちが廿五年より三万二千石増は  
る山井スキー類二萬八千石、ビール類十七萬石、  
千石葡萄酒類廿五萬千石とありてある。年  
々密造が大幅に上りつゝあることかかぬ。  
若し夫れ拘束命令を考ふれば、禁酒違反者



毎年六千三百番人から六千八百番人と増え、その中  
に約二千人は酒を拘束せん比ちある。平均して一  
人二三人、乃ち男の全数八十人の酒から奪はんばま  
じ拘束せん比ちある。さうしてある事はおかし

八月三十日記

○此の散策中、高崎を其時夜ともうするところ、  
ウ、ウ、エントウに大勢が立止まりてあるから、何を  
へて見ると、皆が善光寺の辰橋をたより、おぼろ  
をみる。そのうち、善光寺の辰橋の、此の宮の、ま  
あつてある、まの、尼公大師、八瀬、に乗つての行  
が、五、六、段とあり、佛や役人や、徒僧や、白丁  
とある。十一、二、百人形、おぼろ、の、おぼろ、作ら

少佳子よそのけ お鳥がて申す

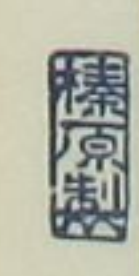
一茶

おの。序の中の陳列を七人をも階上より上つて見る  
と、善光寺の全模写と山門の模写が可なり  
大きく、物も七割ち平らな心で、その中央に陳列  
してあり、其の内圍より冷たい物を展べて善  
光寺の縁起を示す代り、其の内に十箇所に  
区劃して人形を以て陳列してあり、其の

標

縁起の終るまで佛壇が飾られてあり、善光寺の献  
物としてあり、善光寺の佛壇を以て、其の  
としてあり、其の佛壇を以て、其の  
多かつた大雲山の大雲山の日、善光寺の  
自ことし、紀念物を出来ぬ、善光寺の  
お観音の爲の臨、善光寺の  
がお参る本坊の善光寺の、善光寺の  
高して、お参る、善光寺の、善光寺の  
訪りが来る、善光寺の、善光寺の  
つけ得る、善光寺の、善光寺の  
のもの、善光寺の、善光寺の  
七人の目と、善光寺の、善光寺の

をおしつゝ浴衣地を懸換するると一茶好といふのが  
 目に入つた。一茶を好む身も見えを見ぬ、  
 が去来、二三及中を換するると一茶の句が難冊  
 であつて、文抄の多の句を形とつて深めをあるの  
 日産の●文抄のあつたもの内子の為めよ求めた。  
 偶れ、一茶好の及物が愛り出せんとみれば、敢  
 て善光寺展覧に因んばよとも思ひさうが、一  
 茶の善光寺といふ節り遠くらの<sup>善光寺</sup>の生んじ父  
 の大病の時、あるときと善光寺の<sup>生来</sup>の生来し  
 て薬師や分ち物をと買つた比、一茶自らの  
 比もあつて、此の展覧に入れば、因縁もあるが  
 半らして得し得しつゝ、<sup>八月廿日記</sup>



一茶が少々の動物の回傳があつたこと、  
 此出動物ぬきふ内子、<sup>八月廿日記</sup>

○住江金之の酒と云ふ本を後みちをわく酒の  
 一茶後珍淡の篇中、酒樽のことが二件見入  
 ちみち、其の者御まゝあつた事、<sup>八月廿日記</sup>  
 十四年、<sup>八月廿日記</sup>

一、<sup>八月廿日記</sup>  
 家屋の中、忠孝氏の酒倉の隅にある二  
 三年を記した杉の老木である。七月廿三日  
 突死軒から多量に酒樽を令人に索

が濃き出し或の七種いれ。想に此杉は此の初の  
七八年十数年前者も一書一穂約八分の  
酒粕が出たことかある。いはば昔の酒の  
酒粕が出たことかある。是れが酒の史蹟名蹟天  
然記念物酒粕を人々の酒粕と命をいして登  
録しれ。

もう一つのえは、杉の杉の杉の中領域郡  
吉川村片町、倉茂と嘉花氏の庭芝の  
杉の木がある。同年（大正十四年）十一月一日  
ふと杉が折れ、地上七尺計の家を折れ、  
津山集まうと居る。蜂と追のけをえり  
何の酒の香のする汁が出ている。試す。



器をまけてえり。一穂に二合の七取の  
味の善悪の酒に少し苦味がある程な  
ど、白きも濁りておれといふ。昔の酒を  
此の杉の酒人の想に、何の酒の史蹟  
を吸つた、杉のえは、えは、えは、  
倉茂の杉の酒も、あつてもあるか、  
かく、えは、木が白く、生産し、  
おれといふ。不思議の想もあるが、  
街上全く根拠の事もない。

酒粕の姓もあるが、前二件のことく、  
例に添といひ。全体植物の体も、  
念ずんて、此の糖合が木の各向部

運送、一部分は新しい組織を振る材料として一  
部分の酸化分解して流動のエネルギーを生ずる。  
糖分の分解は多量に酸素の供給が十分である  
ん、全部炭酸瓦斯と水とを生成して仕舞ふが、酸  
素が不十分である、分子間呼吸と云ふことが  
起つて、アルコールが出来ることがある。そのアルコー  
ルに糖合や他の材料がまじり、殊に杉の樹の体ん  
の杉の香も交つて、充分から杉の酒精から出た  
酒の風味を醸すこともあり得べきことと化  
学者が言つてゐる。

八月五日

○是れ八月と云ふお別れがある。○是れ八月のつらいく  
と云ふが毎年の事だに云ふを得るの氣がなす。

おとす四十日は、金中、あつて、さういふ  
とき思ひが、さういふ、問ひ、さういふ、さういふ、外  
へ、思ひ、さういふ、さういふ、さういふ、さういふ、外  
涼り地、さういふ、さういふ、さういふ、さういふ、外  
住宅の、さういふ、さういふ、さういふ、さういふ、外  
し、さういふ、さういふ、さういふ、さういふ、外  
外へ、さういふ、さういふ、さういふ、さういふ、外  
ことが、さういふ、さういふ、さういふ、さういふ、外  
困り、さういふ、さういふ、さういふ、さういふ、外  
の家、さういふ、さういふ、さういふ、さういふ、外  
と、さういふ、さういふ、さういふ、さういふ、外  
か、さういふ、さういふ、さういふ、さういふ、外



もの運んでは芝居に出て仕舞う活動映画も又  
流行つてもする。午睡を好むものが流行する  
時間酒を飲んだ小説を後人がり七する。  
先来又、出て夜を酒を飲んだこと、  
と盛くするの、随つて家庭をつけたら、夏  
月がある。若い時家を外へと家庭を守る  
たことを思ふと、人も多くいる。氣味味、  
もう曰い、昔あつた月、何れも、但し、  
的、あるの、日若月、何れも、  
家、何れ、又、何れ、  
事件の事件があつた、金が無つた、やうなことが  
あつた、といつて、勝手、氣味味、  
標

する物やが、あつた、人間、老し、  
あつた、こと、あつた、不幸、  
を、免か、あつた、あつた、  
入、泣き、内へ、外へ、居、  
方、り、家、  
勿、休、ま、い、  
八月三十日  
俺が夏の記  
○山崎横濱が、新、  
一、比、銘、  
言葉、  
る、  
習、





忘んまひをいそいで飲んぬ揚句空罎を委棄せ  
 ずぬくも持てる(一)こととて、さうして、みづ汽車  
 飲んぬの扱ひある。流るる麦酒四地けに空  
 罎を揚りて、さうして、國民性がえへる。どこか今  
 社に心つたふむ扱着る。空罎も利用して  
 あり、麦酒を供給するの、緊佑経済の要を  
 得た、よふ思ひつきてある。漢癖の日本人は、  
 さうと箇扱ることを、庶民が、まゐり、空罎も  
 莫加  
 けたこと、此、空罎の扱ひ、さうして、  
 又、戻り、二、三、の、務め、三、三、の、務、  
 七、一、として、ある  
 ことを思ふと、庶民の、道、得、い、さ、う、の、  
 答、だ、  
 〇 往江全之の著、一、酒、の、一、書、一、通、書、  
 著、者、の、一、酒、



通、一、扱、へ、ん、の、傳、言、一、等、と、ある。近時の酒家の  
 通、一、扱、を、書、き、交、せ、た、名、取、て、一、く、一、く、  
 が、何、故、國、務、と、酒、着、く、一、政、治、と、酒、と、ま、よ、こ、し、  
 ぬ、題、目、に、解、ん、さ、う、つ、れ、の、だ、ら、う、か。い、ん、が、酒、の、  
 為、め、氣、を、吐、く、よ、い、る、く、い、ん、が、酒、を、説、め、さ、る  
 よ、い、無、い、と、思、ふ、に、政、治、の、公、務、に、あ、る、(一、  
 本、書) 一、く、待、合、え、酒、を、飲、ん、ぬ、政、治、を、後、に、さ、う、  
 政、治、の、要、協、を、や、つ、さ、う、ま、い、ら、う、と、い、ん、を、推、し、て、酒、と  
 政、治、や、酒、と、國、務、に、本、来、関、連、を、許、さ、う、い、題、に、あ、る  
 一、く、さ、う、の、野、暮、の、骨、頂、に、あ、る。維、新、前、後、の、國、  
 と、あ、つ、て、の、志、士、の、さ、う、い、は、さ、う、あ、つ、て、の、日、あ、る、か、  
 ら、ま、い、酒、  
 其、の、危、険、の、境、思、出、に、ま、つ、て、奔、走、し、た、ま、い、が、酒

ろくろし如何ぞする。懃懃懐を遣り得ればあるか。事を  
行ふは先には同志と能く替す杯は去り訣別の酒  
であつたらう。事成つて祝ひ酒が役人を以ち極  
や兼有兼街に於て酒を飲見ればとて。美の  
頗る意味ある酒は酒を飲して肝膽お照  
しとて也あらう。酒あるが故に乖離を理めれ  
ば今もあたらう。酒あるが故に同志を糾合しとて  
あたらう。大きく云くは強清の公徳連。衛七酒を藉  
りて出来れば云ふこと本末もへ得ふはあら  
う。莫平末維新の歴史。酒臭の歴史はあつて  
傷めべき送事か決して少くも。血生臭い歴史  
史だと思ふ。一面のみをえる偏見がある。品川

品川

次郎が此のれをいふ。あの錦の御旗を知らぬか  
のトコトヤレ。即ち莫平軍を討滅する。方のあ  
つた行進曲は。このれをいふ。京都の妓楼の酒の  
り。生臭いと思ふ。酒臭い歌がある。前島野舟  
が徳川氏の為めの浪政府の役人。又元入。我々も苦  
心して。役人が花魁を擁して。寝た。所々自  
から杯盤を持ち。日。酒味。つげ。利頭目  
のを連。し。酒の功德。と云ふ。と得  
ぬ。木戸や西郷や。京都。凍連。此。遺蹟。情  
況。今。向。は。平。鮮。の。在。存。を。みる。菅野の。情  
慨。家。を。い。ま。酒。を。藉。り。て。城。坂。の。氣。を。  
吐。い。た。と。い。ふ。酒。を。け。ん。唯。の。人。が。あ。つ。た。と。い。ふ。

やう。杉浦天台が東宮の師傳傳々し時御前（石）解  
へかえらる。雪井龍雁の緑い遠い紅い沈み情と  
てかろしうの詩や天川の空をキハ丸らしむ空一の  
待を得る意に歌つれとまのことも。維新次の志士の  
型をそつくり其後又あらへしなる道きまの。酒と詩  
いろいろ附きまの酒まの。必新詩の詩が付ふ。蘇田  
東湖の瓢兮ここの長き酒が如何なる時々の志士の  
酒席を歌らん。そんなが如何なる志士を鼓舞ししれ  
か。山陽の日本外史の時評本勤王と大なる援助  
をうしれとまのを否といふいふの山陽の酒飲ひあ  
つれこしが志士の氣を入つれことも忘るていささか。山  
陽の酒詩が志士や慷慨家を鼓舞しれことも亦甚



に大なるよふがあつれと相違する。高時の書生は今  
の書生と異つて酒量があつた。彼等の血の酒を依  
つて湧き激越回難に當るの勇を鼓舞しれ。革命  
と酒の離れ難い因縁がある。土佐をいふ尤も酒を  
飲ま回し維新の舞台に飛躍しれ面々の傳ひも書  
かんといふ酒を離れてい書くこといふ未だ。酒の土  
佐といふよのを書いて見れいとも思つてゐるやうな次  
才も酒の酒の契い回し回をこけすこともある  
か。亦回を興すこともある。維新の革命を成就  
する酒の酒かどの位手傳つてゐるれらるか。畏ん多  
いことある。維新の鴻業を大成せんとせぬ不世出の英  
主明流大帝七帝に酒を味ませる方いあつれこ

とを最後の二巻についておく。酒くらふ著書のいぢり元知  
ある作新の酒と述するもの龍を書いた心眼  
時を記しるいと日記といふもの九月一日録  
○湯に水府青山延文著す所の刀剣録を後  
此方珮伝有於著の一書。余刀剣の書と花  
ふも未嘗うて漢書が今之んを漢書に秋刀を籍  
り海島を拂いんとするも、本邦刀剣の書汗  
牛元棟堂らるるものあり、知んとも多く相  
力の者よあるやん、名物牒と唱ふるに刀漢若  
くは刀工漢書<sup>一書</sup>を軍書に散見する刀のア  
チンドロトを編輯しるものあり、此者の  
其の淵を補いんとするものあり、委しからんと

標原

七要を得たり。凡そ刀剣録を撰  
るの治欠格を有するものあり、<sup>半</sup>刀の用  
けり。口云ハ一部研人の書である。多く名刀を挙  
げたる點<sup>一</sup>を見んば、名刀漢書である。多く著  
●靈異傳説を添へたる點<sup>一</sup>を見んば、  
靈異記である。名刀が戦功者●を賞する  
典へんもの點<sup>一</sup>を見んば、賞典録である。各工の  
氏名を記し其の技術を因縁しある點<sup>一</sup>を見ん  
ば、名工録である。刀●史を案して書不忍儀と  
もそのべきに刀工の技術の由来のこぼす進歩を  
見んば、名工の書である。多く<sup>一</sup>見んば、  
と、刀工の<sup>一</sup>作者の頗る多く伝わり居ること

相刀の藝術の進歩一途のことである。上代のこ  
と曖昧な尾し今俾ぬる由なきも十古月の大  
和より早く天國がある。一条天皇の御宇と云く源  
平二氏の時であるが、源家貞の御宇の頼朝切腹の  
家家の小島拔丸の名ありいよび、軍忠の伝説で  
名ありはたつてこそ、事實將帥の差料と  
て後世仰き得る名刀と云てゐる。武門のホ一  
ハ寶と云ふこといふから、當時早く名工の  
起興つたこといふの不思議である。名刀の多く傳  
つてゐる名工の時代から徳の始りゐるまで武士の  
蘇えりしと云ふこといふ他の狀三層のどうさ  
て七寶刀九けい、飽を保護しは結果より

源平

くさるゝの事ある。當時の人の家より何人の名刀があ  
ること武門の事、徳の事さうだの事、後者の揚  
句義利名、才一と云ふたの刀であつて、それら  
利者の、平の秘り、或はそれ刀が互換義のあつ  
たもの、賞として其へたれ、ことが歩くと  
あるが、それが死流の河へ流れてゐると云ふ  
ので、名工は人々の其家に十銃を珍重したの  
亦名刀の保存であるに所成である。作者の  
多く傳つてゐること、他の工芸に見ると  
とが出来る。このこと、少くも数多くある  
の事、名刀を重んじた結果である。是れ  
時代の後世、人を愛する、後世のこと

く土地を割いて其へんとしても土地が無つた  
の代へる刀を賣ると其へん。そこは相刀  
の必要が生じぬ。本阿弥院佛と云ふ相刀の  
名家が此へから、子孫に其業を傳へて、其  
の刀七月日を得て、其後か定まり、刀の價ひ  
つけるとして行へん。相刀家の金何るあ  
る。その相刀も古いに折派を日つけるとか  
如きなり。その相刀の何を標準とせよと云ふか知ら  
る。いかに、名刀の非者も高にお飾が信じておる。  
そのまゝの領土を得ると、一刀の價は日定  
か、其優越のものがある。お刀の術は、愛刀家  
は、傳つて今日まで、或る鑑識家が刀を

割して産地の勿論、お刀古刀の別、勿論、刀子  
作家の花まが、落款を見ずる中、そのま  
あるの七刀の致味の良、其業であるか、此道  
の鑑定は、素直や骨董の鑑定に比して、一考心  
を抽いてゐる。の、宜くある異ひある。  
何人の藝術、術ひも入神の域に入る。この、容易ひある  
か、刀、花と二人が精根を凝らし、此、下、方、武人  
が、劍術の精神、其、術、に、極、分の精神を、書、注、い  
たのとお待つて、人間業を、記、載、する所、を、行、つ  
た、と、云、つ、て、也、と、云、つ、て、証、言、ひ、さ、さ、さ、う、何、人、を、  
子、業、業、人、を、研、究、の、つ、り、業、か、ある、人、を、研、究、さ、す、  
ある、人、は、人、を、研、究、さ、す、死、活、の、お、う、さ、す、所、に、

今更<sup>に</sup>刀の精<sup>を</sup>利鈍<sup>を</sup>測<sup>する</sup>。いく<sup>も</sup>劍術<sup>を</sup>  
三<sup>を</sup>下<sup>して</sup>みるも鈍<sup>刀は</sup>。勝<sup>を</sup>期<sup>し</sup>難<sup>い</sup>。劍道<sup>は</sup>  
五分<sup>刀</sup>五分<sup>人</sup>。武<sup>才</sup>劍道<sup>は</sup>。七<sup>分</sup>の刀三分<sup>とす</sup>  
のよ<sup>うな</sup>自分<sup>の</sup>如<sup>うな</sup>利<sup>刀</sup>が競<sup>闘</sup>。大<sup>刀</sup>切<sup>り</sup>  
であつたこと言<sup>ふ</sup>もむ<sup>ろ</sup>。刀工<sup>は</sup>人<sup>の</sup>命<sup>を</sup>司<sup>る</sup>  
やうなものであるから、精神<sup>を</sup>集<sup>注</sup>して百<sup>錬</sup>  
千<sup>磨</sup>尚<sup>ほ</sup>足<sup>ら</sup>ずと全力<sup>を</sup>を<sup>ら</sup>け<sup>ば</sup>の<sup>ち</sup>無<sup>規</sup>  
無<sup>則</sup>。

二<sup>は</sup>お<sup>の</sup>心<sup>を</sup>人<sup>間</sup>の<sup>精</sup>神<sup>を</sup>注<sup>け</sup>ん<sup>が</sup>  
其<sup>物</sup>を空<sup>心</sup>す<sup>る</sup>。投<sup>神</sup>入<sup>る</sup>もま<sup>ま</sup>七<sup>霊</sup>  
を意味<sup>する</sup>ことある。刀<sup>は</sup>人<sup>間</sup>の<sup>心</sup>の<sup>所</sup>の<sup>よ</sup>  
にせ<sup>る</sup>。刀<sup>の</sup>活<sup>物</sup>である。適<sup>つ</sup>て刀<sup>を</sup>活<sup>物</sup>を以<sup>つ</sup>  
て扱<sup>い</sup>ぬか<sup>ら</sup>ぬ。自分<sup>の</sup>刀<sup>は</sup>味<sup>が</sup>あ<sup>る</sup>七<sup>霊</sup>  
の<sup>ち</sup>入<sup>る</sup>か、名<sup>刀</sup>を扱<sup>いて</sup>入<sup>る</sup>ことあら<sup>く</sup>と  
ぬる活<sup>氣</sup>を感<sup>ず</sup>る。何<sup>と</sup>も刀<sup>身</sup>を空<sup>心</sup>  
氣<sup>が</sup>主<sup>昇</sup>の扱<sup>る</sup>氣<sup>が</sup>。ま<sup>ま</sup>殺<sup>氣</sup>  
であるか、い<sup>ふ</sup>か知<sup>らん</sup>か。長<sup>く</sup>扱<sup>き</sup>離<sup>れ</sup>刀<sup>の</sup>  
の凝<sup>視</sup>を續<sup>け</sup>ること出<sup>来</sup>ない。ま<sup>ま</sup>行<sup>は</sup>  
々の聯<sup>想</sup>も仲<sup>の</sup>か<sup>ら</sup>ぬ。こ<sup>ん</sup>を活<sup>氣</sup>  
氣<sup>の</sup>漲<sup>り</sup>。い<sup>ふ</sup>。自<sup>身</sup>を活<sup>物</sup>と<sup>す</sup>。

友<sup>那</sup>詩<sup>人</sup>王<sup>穉</sup>登<sup>が</sup>揚<sup>州</sup>の<sup>異</sup>燭<sup>日本</sup>歌<sup>の</sup>入<sup>手</sup>選<sup>定</sup>  
疑<sup>校</sup>其<sup>流</sup>。以<sup>外</sup>湖<sup>深</sup>恐<sup>死</sup>。朱<sup>提</sup>夜<sup>傳</sup>。其<sup>人</sup>  
其<sup>谷</sup>を<sup>い</sup>ふ。詩<sup>人</sup>情<sup>用</sup>の<sup>形</sup>空<sup>心</sup>であること云<sup>へ</sup>。ま<sup>ま</sup>活<sup>物</sup>  
扱<sup>を</sup>し<sup>て</sup>みるのである。刀<sup>の</sup>附<sup>属</sup>も傳<sup>説</sup>が昔<sup>し</sup>  
の武<sup>士</sup>の心<sup>理</sup>作<sup>用</sup>とぞん<sup>だ</sup>。利<sup>敵</sup>に<sup>て</sup>あるか、日<sup>本</sup>  
も、今<sup>の</sup>か、思<sup>傳</sup>。浮<sup>氣</sup>よ<sup>う</sup>かある。又<sup>味</sup>と云<sup>ふ</sup>  
刀<sup>を</sup>活<sup>物</sup>と<sup>す</sup>ん<sup>だ</sup>。恐<sup>る</sup>ま<sup>ま</sup>の<sup>信</sup>念<sup>が</sup>  
かあ<sup>つ</sup>た。お<sup>の</sup>心<sup>を</sup>空<sup>心</sup>す<sup>る</sup>。誰<sup>ん</sup>の<sup>心</sup>の<sup>信</sup>念<sup>が</sup>  
かあ<sup>つ</sup>た。其<sup>時</sup>の<sup>刀</sup>を扱<sup>け</sup>ん。氣<sup>爽</sup>然<sup>と</sup>。其<sup>心</sup>の<sup>信</sup>念<sup>が</sup>  
此<sup>の</sup>お<sup>の</sup>心<sup>を</sup>空<sup>心</sup>す<sup>る</sup>。誰<sup>ん</sup>の<sup>心</sup>の<sup>信</sup>念<sup>が</sup>  
かあ<sup>つ</sup>た。其<sup>時</sup>の<sup>刀</sup>を扱<sup>け</sup>ん。氣<sup>爽</sup>然<sup>と</sup>。其<sup>心</sup>の<sup>信</sup>念<sup>が</sup>  
かあ<sup>つ</sup>た。其<sup>時</sup>の<sup>刀</sup>を扱<sup>け</sup>ん。氣<sup>爽</sup>然<sup>と</sup>。其<sup>心</sup>の<sup>信</sup>念<sup>が</sup>

日と凝視を續けるときは出末さういふ入りの症  
 々の聯想も伴ひのふらむもあつてかゝるを流  
 氣の漲るよりのさういふ自來法おまへす

友那詩人王釋登が楊伯の吳炳日本歌のあゝ入手眾  
 疑位世に龍川外湖深恐死を朱纒夜縛ちて人  
 共谷をこゝちる詩人傍用の形容があるといふ一  
 折扱をこゝちる詩人傍用の形容があるといふ一

*Amor - the love of the gods.*

*The ecstasy of the gods.*

*And the ecstasy of the gods.*

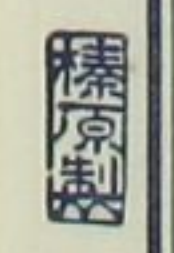
靈術の進みもさういふ

又出末さういふ。刀と就て種々、運具の傳説があり  
 〇位す可なりさういふものもあるが、石を断り鏡も身  
 を断り、鐵鏡を破るゝもの、**鐵鏡**の決して其  
 築室の傳説いさういふ事、**實**あることある  
 〇今日いすう刀工〇〇印刀をもと心せし又〇  
 〇其の鋭利の優に硝子を断り得るのいさ  
 〇かせん。

昔し武將はぬいす刀を佩ひてたとさういふが、  
 あらうか、武將の騎馬の人から、自然に刀を  
 〇〇あるさういふ、後世切り留めを用ひたとす  
 例が得にある。今刀劍如く、**古の長刀**の  
 三八のさういふ、元弘年間、丹波、人法



孫五中の佩刀は五尺三寸とありて前無の刀  
である。南北朝の戦事より、駿将猛士は其の  
を用ひてゐる。その野史を記へてゐるのには長  
年、畑時旅の隆保伊加、木寺相模、野木頼  
玄らもその刀は四尺三寸、和田正朝、阿部忠実  
の刀は四尺六寸、足利康長は四尺八寸、松宮  
父子の刀は五尺二寸、栗生顯俊、妻鹿長宗の  
刀は五尺三寸、大高在常、南都六郎土岐基忠の  
刀は五尺六寸、赤松氏範の刀は五尺七寸、福津  
小次郎の刀は六尺三寸、安田陣心の刀は四尺七寸、時  
海内無双と云ふ刀は因幡の人福間三郎の七尺  
三寸と云ふ刀は古くより第一の長刀である。此の



山中幸盛の刀は四尺五寸、上家種は四尺八寸、真  
柄直隆の刀は四尺三寸とあるが、此の長刀が表  
へは、あかしく相野の役は敵軍の氣を破つた  
との長刀があらうと云ふから、相野の長刀がま  
いに用ひらるゝと云ふ。其の利は、倉本、檢  
代、得宗も在りと云ふてゐる。其の刀は、長  
鎌を用ひるゝ長刀の何と云ふと云ふは、長刀  
の不便を説くものである。  
日本刀の折れは、後三つと云ふて支那人の号  
といふ事、折れ七人を斬り、斃に例も、折  
折んたのを磨いて短かい刀を仕つた例も、或  
は武將の愛刀を侍者が誤つて石の上へ落

鋒先きを缺いた時刀工の之を足して鋒の換し  
此のい富より幸う北刀の中分は鋒の換しと云  
ふて研き更しを良刀を得たと云ふ例もある四  
尺五尺の長刀の前ももさふにこそよく研き給  
めんとさるるす尺を得ておるものかいくらも  
この個抑えさし得ることか名刀の名刀なる所以であ  
らう。日本の古へ化品の知識もさういふ譯心  
あるのん。実験から世界のあらゆるスチール  
も及ばぬ。月堅くえい且つ鋭利の刃金を得  
たるは真にあらべきである。天津の礮塚  
の事記述にさる鐵板を二尺の長さ、酸素  
を斯く用ひて得たる金庫の金庫の鐵を

標記

鐵法の一端は全浙兵制に出ておるのむろ一斑と  
知ることか出来ぬ。全浙兵制の如人が書はれよる  
は日本のもをいふ者いであらや、我ら刀の製  
法に就ては曰く

明人記我刀曰鐵匠能制利刀非獨取鋼  
為利生鐵入鑄入煉成而復毀毀而後  
成。朝專煉煖炭入濕泥如此一百二十日  
二成其刀可以吹毛割鐵也

名工が一刀を造るに百日以を費すは例の文獻  
にいくらも存してあり、鉄鍊にめぐる冊紙さ  
や、老兒さし、内前助其、錫合とある

時惟康親まじしと其の投入就て問はんは

助真曰百鍊之別、精神鍾焉故只云

靈異能動神の俾之泛海則鯨鯢伏

仰之夜行則魑魅出、苟世愈平鍛冶不

異、鑄基何以有靈、取也、林美也、  
神也

と云ふことハ刀剣秘録の典故のあること

此が決して誇強の言といふ思はんぬ、西洋の科

言の力が砲彈の穿ち得るの目録秘録を心

の如く、酸素及び磁解の出来ぬ城を二風し

りしてある事、ことを考へると、日本刀が不思議

と云ふ思ひ、靈力の威力を備へる事、



成りしは、美長研鑽と稱する功と云ひさる  
を得ぬ。

日本の造刀術の甚幸ハ早く一任天皇(孝六十

七代)の頃、ありと云はん、おろそか、天白帝自守

受刀の取味が、あつた、自から名工を特回し

造らうめらん、後鳥羽天皇、ありと、刀者

多い、多くの文献が傳つてゐる。、此天子の御宇

頼朝が鎌倉で幕府を立たし、、あつて、時、七時

にある。、天皇が、刀工の、パトロン、と、する、将大、励、あ

ら、せ、らん、ん、か、ら、、、而、後、の、者、幸、い、え、こ、へ、き、こ、の、あ

あ、つ、た、、、打、ち、ま、い、、、刀、剣、録、ま、ん、た、の、ぬ、く、え、へ

る、

後鳥羽帝好刀劍、凡天下劍工、更者造刀、山城  
則田友、田安、備前則則宗、延房、宗玄、助  
宗、延房、宗玄、助宗、行圓、助成、助延、備中  
則貞次、恒次、次家、比一時之選也。鑑外四  
福之上、庫刀、誠傳帝令次家造刀、樸、新、輝之  
輝、瑞所鍛、源久刀、莖形、為花、世謂之、菊、御  
心、右刀鑑快利無比、多助武人云云

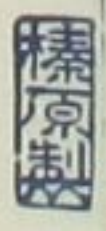
帝ハ隱岐ニ流スルモ高休工を乞フ刀を造ラシメ  
比と云く傳くらう、古刀鑑鑑る、名工一文字、宗玄  
帝ニ隱岐ニ事ふとあり、皇後の劍工、行平、紀新  
大夫と稱ス、比行平也、帝ニ事ふとあり、經伸  
の佩刀ハ行平の造る所多しと云ひ、後宇多



帝の時、栗田工存、四甲を克の技、精妙、傳無  
く天下傳く、て實、是とあり、比の、後鳥羽帝の  
御澤とあり、いとあり、此帝の、莖、昔、拈、道、如、何  
比、造、刀、大、多、う、影、如、音、を、大、け、り、比、公、志、傳  
とあり、あり

相劍之術自古有之然不過相其吉區至於  
論其工拙視其真偽正宗始得其妙人

正宗傳之貞宗貞宗傳之秋廣秋廣傳之  
亦為經心廣心傳之寧都寧都三河相考三  
三河事逐利義政當是時汝內擾亂威  
令不行將士有切而不能從以義政百憂之  
乃命三河相古今名刀各定其價以賞賜將  
士刀有定價自此始也相一語考先  
世呼慶卡以後刀劍曰新刀新刀則山城國慶



肥前忠吉大坂井上真政為巨魁世初銳利  
刀曰大朝野二役亦去憲諸將士之或之兵  
其合四廣忠吉銳甲明人曰上古倭刀  
以年久者為貴而未新鑄之刀終為利  
其蓋指四廣等刀也

○従人大定三ヶ月の作の鳴立洋の謡曲あり其の枝本  
ありて備に定田善次郎の花の中よりあり。此の  
如くも四人に須知んとす

○岸田の香月漱歌梅の口才政画冊を撰ぐ未  
り未すともあり。斗二十四枚を略勝梁とす  
す。画も亦妙とす。其の巻尾の談話に云く

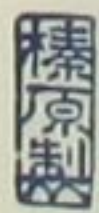
余亦亦也月漱の事不能忘也時

記花筆。暮る小景。今又庭前梅  
雪成る。不消。蓋。酒。在。山。志。齋。也。

新定の真

公の坊動き候に嫁ひ入る

九月廿日



○淺間山は此の志きり。探中。帝都のよみ風馬牛  
と云ふとも。まゝに未済と連ねて降天帝都。  
あひ込る。行政の人鼻口を掩はせん。あま  
能はてらる。判り。七年前の大震災記念日を  
こぼし。はかりの口取を。恐怖の念。こぼえ  
る。よみ。あま。今。家の。根。測。ま。い。つ  
一。か。灰。あひ込る。既。定。る。ま。う。難。ま。う。判  
り。何。あ。ま。不。審。こ。思。あ。の。う。ラ。ジ。オ。は。淺。間  
山。降。天。と。云。く。理。由。の。知。れ。な。い。と。初。め  
こと。い。は。れ。し。え。る。所。也。新。定。の。海。の。記。ろ。保。也。ね  
あ

九月廿日



「前電通」五午前市時  
また「淺間山」は大爆発を  
もって、噴出した火柱を  
交へた風を噴き上げて、噴  
を呈し、即ち、噴いて第二  
回の爆発を見、これか、  
群馬縣北の山部には、  
激しく音響地打撃、  
際に性切つて居る、  
群馬縣で、  
群馬縣の山部には、  
激しく音響地打撃、  
際に性切つて居る、  
群馬縣で、

「前電通」五午前市時  
また「淺間山」は大爆発を  
もって、噴出した火柱を  
交へた風を噴き上げて、噴  
を呈し、即ち、噴いて第二  
回の爆発を見、これか、  
群馬縣北の山部には、  
激しく音響地打撃、  
際に性切つて居る、  
群馬縣で、

「前電通」五午前市時  
また「淺間山」は大爆発を  
もって、噴出した火柱を  
交へた風を噴き上げて、噴  
を呈し、即ち、噴いて第二  
回の爆発を見、これか、  
群馬縣北の山部には、  
激しく音響地打撃、  
際に性切つて居る、  
群馬縣で、

に於て、  
は風向の加減で、  
にも、  
師は、  
東京の降灰は、  
十一時半まで、  
あつた。老入河の上、  
は、  
は、  
は、  
は、

に於て、  
は風向の加減で、  
にも、  
師は、  
東京の降灰は、  
十一時半まで、  
あつた。老入河の上、  
は、  
は、  
は、  
は、

に於て、  
は風向の加減で、  
にも、  
師は、  
東京の降灰は、  
十一時半まで、  
あつた。老入河の上、  
は、  
は、  
は、  
は、

淺間山の爆発で  
灰だらけの帝都  
怖い目見た九月上旬だけに  
びくついた全市民

「前電通」五午前市時  
また「淺間山」は大爆発を  
もって、噴出した火柱を  
交へた風を噴き上げて、噴  
を呈し、即ち、噴いて第二  
回の爆発を見、これか、  
群馬縣北の山部には、  
激しく音響地打撃、  
際に性切つて居る、  
群馬縣で、



「前電通」五午前市時  
また「淺間山」は大爆発を  
もって、噴出した火柱を  
交へた風を噴き上げて、噴  
を呈し、即ち、噴いて第二  
回の爆発を見、これか、  
群馬縣北の山部には、  
激しく音響地打撃、  
際に性切つて居る、  
群馬縣で、

「前電通」五午前市時  
また「淺間山」は大爆発を  
もって、噴出した火柱を  
交へた風を噴き上げて、噴  
を呈し、即ち、噴いて第二  
回の爆発を見、これか、  
群馬縣北の山部には、  
激しく音響地打撃、  
際に性切つて居る、  
群馬縣で、

「前電通」五午前市時  
また「淺間山」は大爆発を  
もって、噴出した火柱を  
交へた風を噴き上げて、噴  
を呈し、即ち、噴いて第二  
回の爆発を見、これか、  
群馬縣北の山部には、  
激しく音響地打撃、  
際に性切つて居る、  
群馬縣で、

に於て、  
は風向の加減で、  
にも、  
師は、  
東京の降灰は、  
十一時半まで、  
あつた。老入河の上、  
は、  
は、  
は、  
は、

に於て、  
は風向の加減で、  
にも、  
師は、  
東京の降灰は、  
十一時半まで、  
あつた。老入河の上、  
は、  
は、  
は、  
は、

に於て、  
は風向の加減で、  
にも、  
師は、  
東京の降灰は、  
十一時半まで、  
あつた。老入河の上、  
は、  
は、  
は、  
は、

淺間山の爆発で  
灰だらけの帝都  
怖い目見た九月上旬だけに  
びくついた全市民

「前電通」五午前市時  
また「淺間山」は大爆発を  
もって、噴出した火柱を  
交へた風を噴き上げて、噴  
を呈し、即ち、噴いて第二  
回の爆発を見、これか、  
群馬縣北の山部には、  
激しく音響地打撃、  
際に性切つて居る、  
群馬縣で、

「前電通」五午前市時  
また「淺間山」は大爆発を  
もって、噴出した火柱を  
交へた風を噴き上げて、噴  
を呈し、即ち、噴いて第二  
回の爆発を見、これか、  
群馬縣北の山部には、  
激しく音響地打撃、  
際に性切つて居る、  
群馬縣で、

# 浅間山の爆發で 灰だらけの帝都

## 怖い目見た九月上旬だけに びくついた全市民

【高崎電話】五日午前五時頃、また浅間山は大噴火と共に爆發し、噴の空に火柱を交へた黒煙を噴き上げて、俥を走らし、間もなく續いて第二回の爆發を見た、これがため群馬縣西北の山間部には降灰が激しく吾妻郡地方は打撃く、更に佐之切つて居る、阿上州各署で被害調査中

浅間山の爆發によつて五日午前一時半頃から東京全市にかなり目立つた降灰があり市民を驚かせたが、氣象台の師はこの灰は爆發後折柄の北風にあふられて駒橋方面から輕井澤、埼玉、東京といった順

に灰を降らせて来たもので午後からは風向の加減で輕井澤方面にも相當の降灰があつた、國富技師は語る

東京の降灰は十時三十五分頃から十一時半まで續いた、北風にあふられて全市にわたつて一時は霧のやうにひどかつた、今度の爆發はこの前の六月十一日よりはその程度は輕微だが風の關係上降灰は相當ひどかつた、この前の時は小川方面だけだったが、こんどは全市はもろろん風の方から駒橋、輕井澤、埼玉並に横濱、千葉方面にも可なり目立つた降灰を見せた、淺間は今年に入つてこれで十回余りの爆發を見た、大して心配はないが山はまだ活動中だから登山だけは禁物だ

### 堅い雪が——に

### 氣象台仰天

#### むせぶ人逃げる人

#### 大騒ぎした全市一巡記

秋晴の帝都の空から突然灰が降りだした、大噴火のあつた九月の下旬だけに市民は神經をヒクつかせて大騒ぎ、東京驛前から丸ビル前あたりではバナマに

### 白服

や白靴を氣にしたがらしきりにハンカチで灰を上げて行く紳士、ハンカチで顔をおほつて歩く婦人達、驛前停車場に並ん

である自動車は上から灰粉を振りかけた様に白い、神田邊まで来ると顔や手がざらざらする程降る、自動車に乗つた小僧さんまでが顔をタオルで包んで走る

上野驛前では噴火を汚すまいとガード下に避難してゐる家族連れがあるかと思ふと灰にむせたか顔をしかめて鞆で

### 鼻を

押へてゐるおぢさんもある

下谷區稻荷町の青バス車庫の黒きナマコ屋根は灰が積つてくつきり鮮かなしさをなしてゐる、吾妻橋の渡場から「コノコノ上つて来た老人」河の上も大變な灰でしたよ、目を開いてみられねえだ、みなつせい川蒸気の屋根があつた通り真白だ、と小蒸気を指しながら蛙の様に目をぼちくり

### 立番

中の巡査

「いやもう大變な灰でした、これこの通り帽子のひさが真白です」

なるほど帽子ばかりではない、交番内の机の上もイスも指先で字が書ける様に白い面食らつた市民の中には氣象台へどん／＼問合せるので係員はその返事に轉手古舞もせず堅い雪が降つてきましたか……といふあわて者には係員一同吹き出してしまつた

一番 降灰のひどかつた時は十一時頃で氣象台では芝生に反射鏡をすへて降灰程度を測つてゐたが鏡面はまた／＼間に一面氣つてしまひ

藤原博士や國富技師は眼鏡をふき／＼はふ／＼の體で室内へ逃げこむ騒ぎであつた

### 口を押へた降灰受難

#### 上野所見



〇浅間山噴火の被害は、東京の都心部へ至るにつれて、次第に甚しくなつて、市民の生活に大なる支障を及ぼした。特に、浅間山の北麓に位置する吾妻郡地方は、降灰が激しく、多くの犠牲者を出した。この降灰は、市民の健康を害し、交通を遮断し、多くの被害をもたらした。市民は、降灰から身を守るために、ハンカチやタオルで顔を覆い、鼻を押へて灰を止めた。また、多くの市民は、降灰による呼吸器のトラブルに苦しんだ。この降灰は、市民の生活に大なる支障を及ぼした。特に、浅間山の北麓に位置する吾妻郡地方は、降灰が激しく、多くの犠牲者を出した。この降灰は、市民の健康を害し、交通を遮断し、多くの被害をもたらした。市民は、降灰から身を守るために、ハンカチやタオルで顔を覆い、鼻を押へて灰を止めた。また、多くの市民は、降灰による呼吸器のトラブルに苦しんだ。この降灰は、市民の生活に大なる支障を及ぼした。



永久二年六月以教文王五本書寫  
之了

と記す。教文王何人かと詳かざるも、  
ハチ師範館の考字なることを記す。  
此書、隸書即ち今の真書を標出し、上は篆  
書と冠し、下に及切釋義書を注記する。  
つと揚守教此書を見、顧氏玉命の完本  
を據りて、そのとらやう、顧氏玉命の完本今  
傳へずと云ふ空海の誤るも存在し、  
揚が殘本に對校して、一の吻合するところ、  
つと云ふ、然るも仔細に對校するに釋義及切  
撰者の独自の見地ありと取舍したるものも

少ありと云ふ、一枚に玉命の抄本をと做すべ  
也、況んや現存玉命の誤りも正しなるもの亦  
乏んあらず、故に本書の原本玉命の  
送せし部分の研究する為、必要ありと  
止まらず、現在の玉命を校訂する料として  
七市人かへきこと也。

崇文書院考も、山田名雄の解題あり、今その  
大略を採すとす。

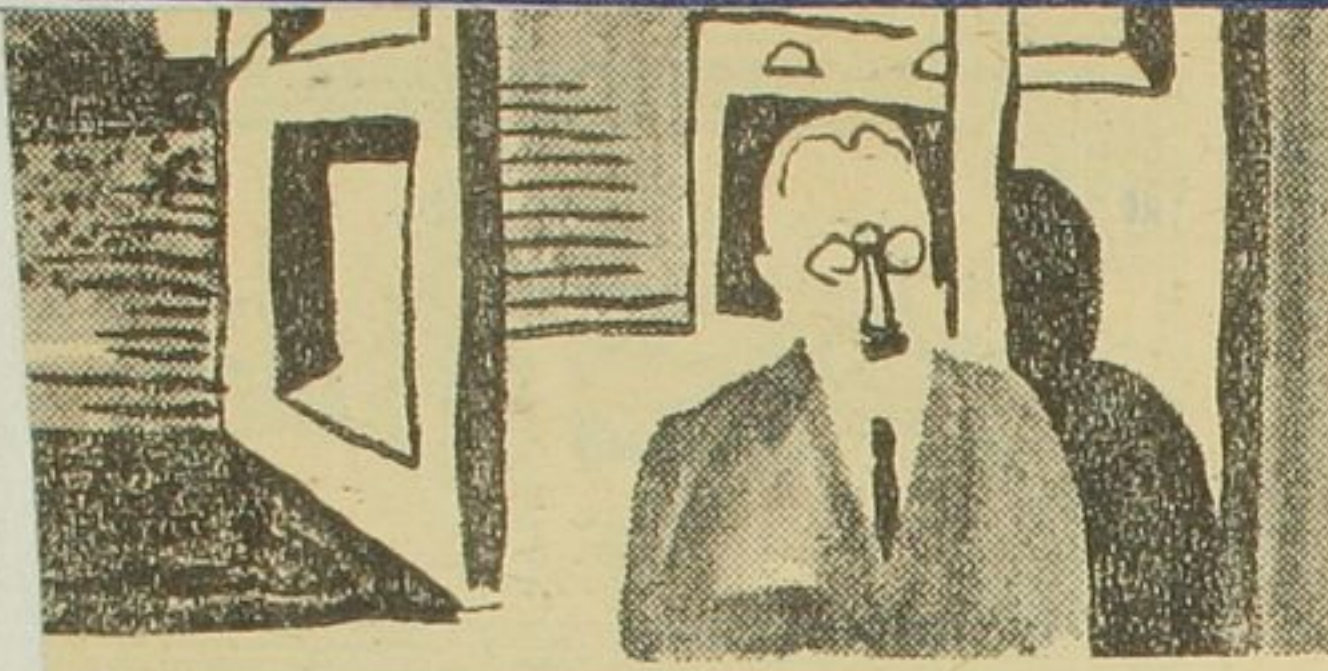
九月七日

口卷、菊志、八本、嘉定陸廷燦扶照氏輯  
録する所、卷首に康延平御朱書の墨蹟  
を朱楊として採り、康延平御朱書の墨蹟  
且、年月の明しあるところ、此書の刊年、

何れのことを得し、是志七類と今ワ一二回考  
 入四語三三曰法四九曰文五三曰詩六三曰何  
 するは、花鳥虫魚の題を以てする、其花鳥の書  
 として最も傷めるものと謂ふべし、余前年多  
 く菊書をも蒐む、此書をを讀き、其菊書  
 漸やく近き、此書の書格、其菊書を以て  
 公指勅を即ち購ひ入る、九月七日  
 〇小室翠雲、草雲の送るを傷み、草雲の  
 草雲の一人也、及つの時目、其菊書を以て  
 其菊書を以て

### 草雲先生と昆虫

小室 翠雲



鹿野轉坤の維新の秋、勸士威として自ら誠心隊を組織し、長槍大馬賊を討つ、漸く復興安寧を見るに至つて遙かに足利の白石山房に餘生を盡ひ、烟霞を侶とし自然を

はこれをよくやつて居た。野の小川に細長き蝶、秋の小さい貝がみ、杭などに寄り、日にさらされ、忽ち赤トンボと化して空中に翔行くのを見聞ける。

それから僅か離れた所に毒蜂、任で有名な渡良瀬川がある。河鹿が名物であるから、毒蜂や蜂、命じて捕りにやり、網をおけふたる女那津に伺ひ、鳴虫の如き音色に首を傾けて聞いて居た。またガラスの空瓶の中へ『トカゲ』を生捕りにして、瓶の上へハへのはつてあるのを見て、瓶を横にする。『トカゲ』は早速出て来て、隙をうかして巧妙に飛びきた。瓶の中へ引ずり込む。先生の目撃極めて無邪な、超人間的のところがあつたがその内に人の知れぬ研究に努められた。大成は決して偶然でない事が知られるのである。

師として、密々日月の輝、山水は勿論、毛虫魚の研究には驚くべき熱心があつたのであつた。白石山房の題には虫の種が澤山あつた。不思議なのはアリの背中に四本の爪が生えてゐて、他の虫を捕らへると背中の爪ではさみ、わが果に持ち運んで行く。また一つのアリは形や大きく、黒色でたぐましいのが、背中に従つて翼が生えて、蜂のやうに飛んで行く。この二種のアリの捕らへて、噴霧をさせるのが先生採みの一つであつた。五合庵の良童、師がシラミに相撲を取らせるのを興じて居た。相撲が済むと自分の肌身の血を吸はせて餌の代りに與へる、かういふ氣持はとても凡人の思ひつかぬ所である。

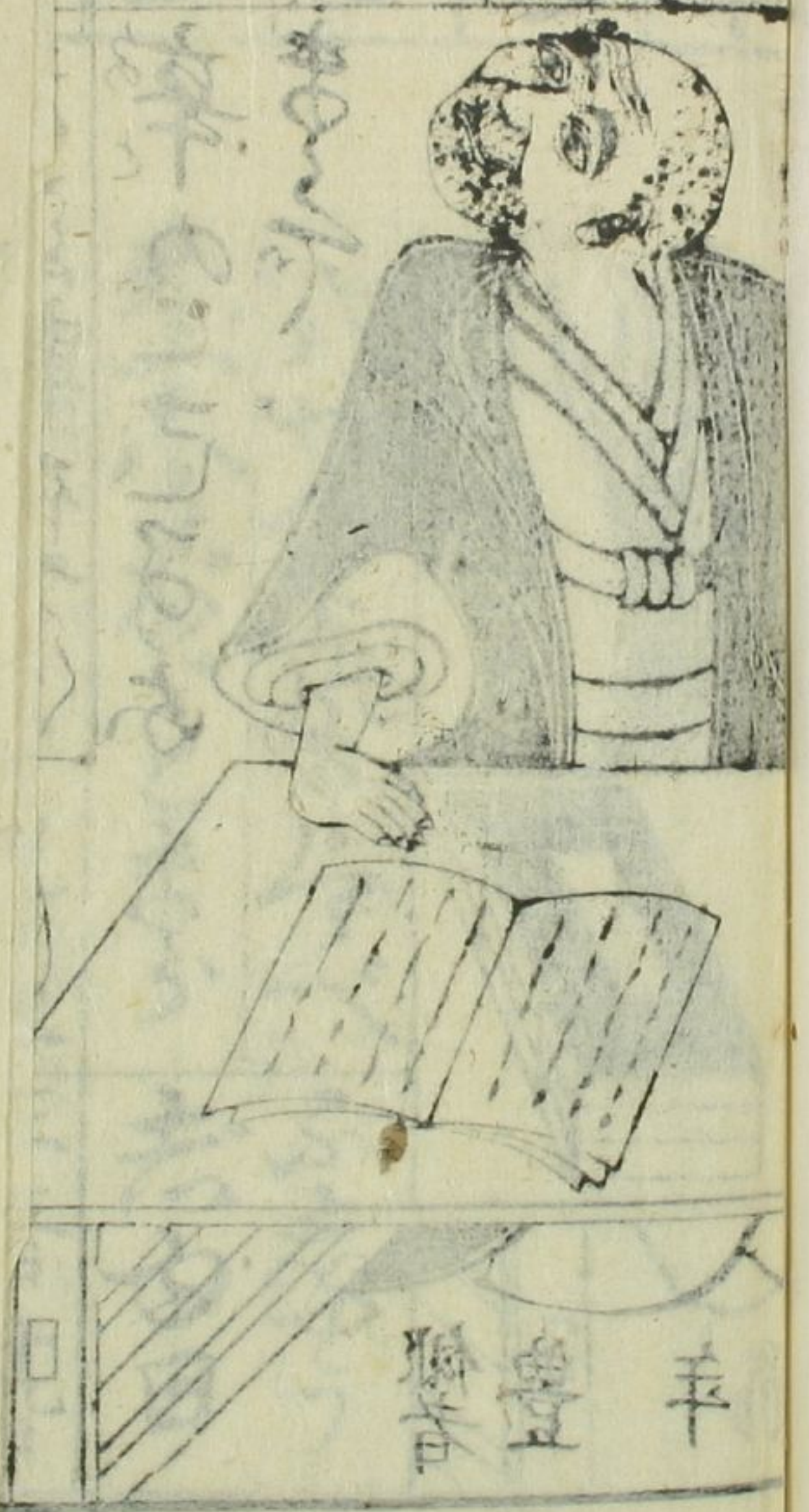
また母屋の床下に摺鉢状の穴を作り、この穴へ他の虫が誤つてすべり落ちると、砂の中から土虎と稱する黒熊な虫が現れ、落込んだ虫を更に砂の中へ食はへ込む。その土虎を捕らへて小皿に砂を盛り穴を作りてハへを捕らへて穴の邊

に出すと土虎が早速ハへを食はへ込む。また極めて堅き土に穴を穿つて棲んで居る、黒の白い身體の黒いのがある。燈心に油をつけて穴に入れるとよく釣り出せる。先生

曰志道軒 寶曆の若し 術類にあふを叩いて  
 後漢を考す、皆る潤房の軍に流つて其も七條の  
 所より、流あぬも亦一紙の書人也、當時流あぬの  
 端に書行し、るホスヌー、その版今亦存するが  
 先頃七一紙を得て、ホスヌー集に収め置し、か  
 ら亦か人々一紙を貯るる乃ちこし、又  
 存すと云ふ。

の若し流あぬの大奥に奉仕の女中、ハサニヤ桐  
 や針をどを弄し、或は裂をもてハエセエを心  
 り、中着を弄るるを心り、或は代紙をもて  
 手に相をを心り、<sup>先ん</sup>己が為め、或は心  
 きし、夫人の姫君の為め、<sup>ル</sup>こと、<sup>隠</sup>入るる、<sup>こと</sup>を

藤原



手紙の  
 文  
 字  
 の  
 様  
 子

十  
 五  
 十  
 六  
 七  
 八  
 九  
 十

60 1 2 3 4 5 6 7 8 9 70 1 2 3 4 5 6 7 8 9 80 1 2 3 4 5 6 7 8 9 90 1 2 3 4 5 6 7 8 9

宝曆 十一 辛巳 己年 万



二かかぬ未まらんで小のぬ

三小はいつ子れけつを大まで

四たよふ午をあやをふかして

五まん志て亥れはつりまのこ

六あもの辰へつよなぬと

七らが成るまをいひはれそ

八りけち卯うりちむさふ

九とれ申むすあを大いふ

十ふりて寅まをよ小ゆり

十一志り未をくまは女世に

十二あまち丑はよ大れどり

む老んをばは庚申むすべのこ

ま甲子までいれちあまこ

巳巳ことなるものかりたうい

おへぬかち十方くれてあま

あのみすめ初午なふりりけん

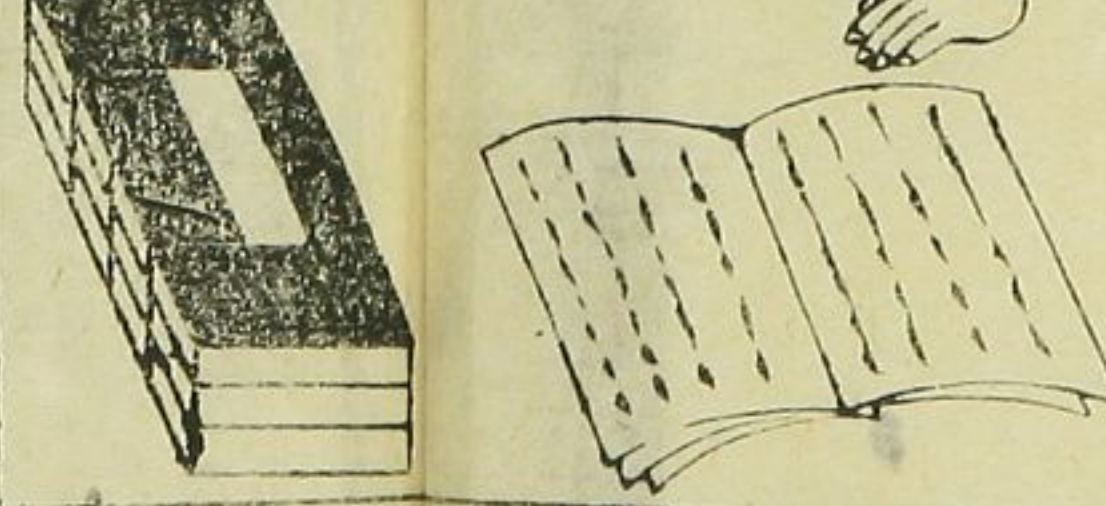
新板



志道軒 秋ゆき

卒のこころいふ

まらで



年 豊 御者

あをいへ世をいふとまら

天ヤ天上今をいとまら

嬢あま二百十身りてね

ひかんとあまひとまら

ちいぬも八十や まらり

全いやあまをわらあま

ちりりあまを 土利あ

角いれてもんけんもたれま

せぬや ちとるまらり

かんの入あやちんまらで

ふまら

志也日

正 三十九

七 廿七

二 十八

八 初九

三 十一

九 廿五

四 初四

十 廿六

五 廿一

十一 初九

六 初六

十二 初七



ちう風車あり、物を入、ハエセエ等あり、流石に大名  
の心けあるを材料も目も細工も物をあつらう。  
巾着の奴の風を擬し、あつらうを去匠より、風車に二  
個あり、丸等ハまくりの体な千代紙、心からべきとの  
まゝに、紙子の別をを用ひて心から、葵形の小匣の  
千代紙と裂んとして心から、蓋の表裏の物巧の  
縫取ま、柄、茶、箱、三、個別々なる風し、  
物巧主人、茶と、思はんぬ、素の、いさくの別をを  
萬甲形、縫ひ合はせ、物を、箱の中するハエセエカ  
し、柄、平、らむと、差込みて、懐中するハエセエカ  
敷、種あり、人形の袴を穿ちたる、世傳を、認ね、女  
ハ今の世子の、一、條、通、し、と、ま、り、似、たり、と、ま、り、と、結



ん、た、ら、う、釋、院、盤、曲、る、ま、の、か、ん、ひ、あ、ら、う、の、袴、ハ、裂  
を、も、て、ひ、ら、り、が、穿、た、せ、ら、う、衣、小、ね、も、り、け、ら、う、  
我、本、邦、人、ハ、手、藝、に、古、一、家、庭、の、世、物、を、慰、ま、る、紙、烟  
工、も、以、て、親、し、む、或、ハ、紙、を、切、つ、て、種、々、の、形、を、裁、ち、ゆ、り、或  
ハ、折、疊、り、よ、り、疊、せ、し、め、る、事、も、既、ニ、他、邦、人、の、英  
と、す、る、所、ま、り、斯、く、手、藝、ハ、名、仕、ハ、し、る、世、中、を、い、ら  
起、り、是、が、善、有、の、家、庭、も、及、び、た、る、か、否、せ、り、未、だ、考  
へ、ざ、ん、ど、未、だ、実、用、の、指、先、を、持、た、ず、物、女、子、が、教、へ、人、の  
指南、を、受、け、け、縫、取、ま、び、交、へ、て、種、々、の、細、工、を、考、ま、  
別、々、と、を、別、ニ、不、思、儀、と、す、る、事、も、あ、ら、う、い、富、時、の、指  
候、の、奥、向、ま、り、ハ、三、原、流、の、儀、式、か、や、か、ま、り、と、包、物、を、  
式、中、の、形、式、か、あり、紐、を、結、ぶ、も、亦、百、端、の、形、式、か、あり

つれ、こん等、勿論、裁の沙汰は、無つれが、こんと、下る、  
心得、形式を、外に、きい、やう、時の用を、兼、つ、こと、は、荒  
—の中、<sup>ヤ</sup>、釋の内、は、あつ、れ、と、す、ん、は、趣、趣、的、裁、術、も、  
お、あ、る、凍、い、し、ろ、ろ、と、い、ふ、道、理、は、あ、る、。自、今、ハ  
穿、つ、て、此、程、の、裁、術、と、深、衣、裁、術、と、を、つ、け、れ、こ、も  
か、あ、る、。支、那、の、婦、人、が、穿、つ、ま、す、に、似、つ、て、ろ、ろ、考、す、こ、も、  
ろ、ろ、無、聊、と、思、ふ、ん、。衣、帛、や、靴、も、ろ、ろ、裁、巧、の、縫、取  
細、工、も、ろ、ろ、と、い、ふ、。一、つ、く、深、衣、裁、術、は、昔、一、中  
將、姫、か、親、糸、で、曼、多、羅、を、纏、つ、て、ろ、ろ、裁、術、に、深、衣、裁、  
術、~~裁、術~~、と、い、ふ、裁、術、は、き、て、あ、る、が、ま、は、て、前、ア、カ、ヤ  
針、で、出、来、る、女、子、お、座、の、喜、ハ、大、概、行、い、ん、或、ハ、臺、お  
師、或、ハ、縫、海、の、裁、ハ、任、師、屋、の、領、域、を、進、入

深衣製

休、笑、か、ハ、作、  
質、錦、ハ、刺、繡、  
か、行、い、ん、大、概、  
家、ハ、奥、か、も、こ、  
れ、と、や、つ、て、依、  
入、を、作、つ、て、相、  
あ、り、補、念、の、  
と、い、ふ、

し、れ、こ、も、<sup>ハ</sup>、裁、術、は、あ、る、。ろ、ろ、の、裁、術、ハ、臺、を、心、こ、こ、ハ  
事、ハ、衣、也、家、也、と、あ、つ、て、あ、ら、う、。不、倉、万、人、之、自、の、カ、レ、  
メ、や、十、六、百、五、十、一、の、カ、ル、ル、を、心、こ、こ、七、手、細、工、を  
や、つ、て、あ、ら、う、。羽、子、裁、の、装、飾、其、他、ハ、押  
繪、七、絶、合、心、の、比、び、あ、ら、う、。絶、合、ハ、こん、等、を、心  
こ、こ、裁、巧、を、裁、術、に、比、び、あ、ら、う、。裁、術、が、主、身、ハ、関  
係、セ、レ、レ、比、び、あ、ら、う、。丁、半、今、が、獲、れ、ら、う、や、ら、う、  
匠、也、を、考、へ、ろ、ろ、の、親、此、ハ、裁、術、や、つ、て、こ、こ、も、あ  
つ、て、あ、ら、う、。京、都、色、は、ハ、女、子、が、離、人、形、を  
心、つ、て、内、務、と、い、ふ、裁、術、は、あ、る、。自、今、ハ、裁、術、の  
と、あ、る、の、裁、術、は、ハ、吉、田、は、遠、の、身、が、其、の、内、務、  
と、や、り、身、体、ハ、衣、帛、お、お、ま、ん、心、り、毎、年





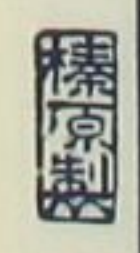
○毎朝多の新書を天を不快<sup>二</sup>感<sup>一</sup>せしめんはこと  
か五十日傍いた。まんハ軍務の實際問題と枢密院  
の組上ニ載せし。政府と院の精査委員の関心  
念の<sup>二</sup>形<sup>一</sup>極<sup>二</sup>こう<sup>一</sup>落<sup>二</sup>着<sup>一</sup>くかを氣をいしめはこ  
と<sup>二</sup>堪<sup>一</sup>り。此の問題既ニ院を<sup>二</sup>通<sup>一</sup>過<sup>二</sup>し<sup>一</sup>てある  
軍令部<sup>二</sup>の<sup>一</sup>マス<sup>二</sup>が<sup>一</sup>あつたがその<sup>二</sup>ど<sup>一</sup>うか片が  
い以後である。金々批准と云ふ先は、枢密院  
ハ御<sup>二</sup>前<sup>一</sup>詢<sup>二</sup>を<sup>一</sup>おし、志きり<sup>二</sup>を<sup>一</sup>押<sup>二</sup>し<sup>一</sup>性<sup>二</sup>  
軌道<sup>一</sup>を<sup>二</sup>換<sup>一</sup>身<sup>二</sup>する<sup>一</sup>の<sup>二</sup>暴<sup>一</sup>と<sup>二</sup>敢<sup>一</sup>てする<sup>二</sup>は<sup>一</sup>必<sup>二</sup>つ<sup>一</sup>に  
のである。

枢密院の諮詢の府<sup>二</sup>は<sup>一</sup>思<sup>二</sup>き<sup>一</sup>ぬ、内閣を監督するの  
権能があることも、内閣を原初する権能の  
のである。

あるもの<sup>二</sup>は<sup>一</sup>さうい。然る<sup>二</sup>精査<sup>一</sup>といふは、諮詢  
詢條項を以て<sup>二</sup>は<sup>一</sup>こと<sup>二</sup>は<sup>一</sup>範囲を擴大して、究  
から内閣大臣を被<sup>二</sup>告<sup>一</sup>し、<sup>二</sup>法廷<sup>一</sup>に<sup>二</sup>引<sup>一</sup>出<sup>二</sup>す<sup>一</sup>こ  
ときハ、大体<sup>二</sup>通<sup>一</sup>つたことである。由來枢密院ハ先帝  
官吏の淵藪<sup>二</sup>は<sup>一</sup>、年<sup>二</sup>齡<sup>一</sup>古<sup>二</sup>稀<sup>一</sup>と<sup>二</sup>き<sup>一</sup>頭<sup>二</sup>肥<sup>一</sup>、既  
る時代<sup>二</sup>は<sup>一</sup>、<sup>二</sup>甚<sup>一</sup>す<sup>二</sup>は<sup>一</sup>、彼等<sup>二</sup>ハ<sup>一</sup>今の<sup>二</sup>院<sup>一</sup>に<sup>二</sup>も<sup>一</sup>  
りも先輩<sup>二</sup>ハ<sup>一</sup>、<sup>二</sup>の<sup>一</sup>矜持<sup>二</sup>が<sup>一</sup>あつて、<sup>二</sup>免<sup>一</sup>す<sup>二</sup>ん<sup>一</sup>ハ<sup>二</sup>我<sup>一</sup>任  
又流<sup>二</sup>す<sup>一</sup>癖<sup>二</sup>は<sup>一</sup>ある上は、彼等<sup>二</sup>ハ<sup>一</sup>、<sup>二</sup>黨<sup>一</sup>的<sup>二</sup>偏<sup>一</sup>心  
かあつて、<sup>二</sup>自<sup>一</sup>家<sup>二</sup>と<sup>一</sup>一<sup>二</sup>派<sup>一</sup>を<sup>二</sup>通<sup>一</sup>する<sup>二</sup>黨<sup>一</sup>を<sup>二</sup>利  
せ<sup>一</sup>とする<sup>二</sup>野<sup>一</sup>心<sup>二</sup>も<sup>一</sup>ある<sup>二</sup>の<sup>一</sup>ハ、<sup>二</sup>其<sup>一</sup>の<sup>二</sup>権<sup>一</sup>能<sup>二</sup>を<sup>一</sup>さ<sup>二</sup>く<sup>一</sup>ハ、  
早<sup>二</sup>に<sup>一</sup>諮詢<sup>二</sup>に<sup>一</sup>對<sup>二</sup>し<sup>一</sup>答<sup>二</sup>あ<sup>一</sup>る<sup>二</sup>思<sup>一</sup>き<sup>二</sup>は<sup>一</sup>、<sup>二</sup>其<sup>一</sup>の<sup>二</sup>か  
<sup>二</sup>及<sup>一</sup>に<sup>二</sup>仿<sup>一</sup>つ<sup>二</sup>て<sup>一</sup>中<sup>二</sup>に<sup>一</sup>少<sup>二</sup>か<sup>一</sup>く<sup>二</sup>厄<sup>一</sup>入<sup>二</sup>る<sup>一</sup>こと<sup>二</sup>は<sup>一</sup>あ

つて、此の院は多く内閣の鬼つとさんである。

此院の厄はさこの減は松子舊時元元院の如  
きものもある。議令開設は先元元院の如  
七議令開設の下秋古を為すやうに設けられた。  
併し議令の如き決議権は附與せぬが、唯此院  
詢の府はさきと違きところと、今日此院  
と異なる所がある。元元院は、元元院議官と系  
連中の内閣の面倒屋が多くあつた。此  
政府は、常々此の連中の横議を舟手古摺  
つた。よむ、政治の運用をこゝが為る妨げと  
こと、先回あつたが、知んぬ。先角諮問の府と  
云ふもの、さうも、偽偽の、人柄、依つて、厄



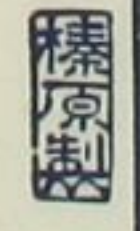
言の

女を生じ、政治は過り無らぬと云ふ。目 務心  
横関が性、政治の運用は、溢流を生ぜしむる  
こと、古今いづこも、ある例である。

杞春院の如き、諮問横関が、動も、内閣の  
運命を司ふこと、セあるの、妙なることだが、若概内  
閣、現に、杞府と衝突して、任辭職をせしめた。若  
概内閣は、失政があつた。譯む、さういふ、先から杞  
府の強勅の過つた、とき、親のあつたの、非も  
と、杞府は、あつた、と、荒概内閣が、屈す  
可く、さう、屈したの、悪例と、後、貶したと、識者  
は、指彈してゐる。杞府の、越権を、務心する、  
こと、ま、この、開、ハ、花、ハ、さう、さう、さう、の、ひ、ある。

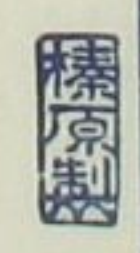
今更の備えハ政府に信託を國民に開けし絶對多數を制してゐる。是れであるに、杞府が  
より議入りの可決する軍務法案を否決し  
た。とすると、政府は是れを爲り、総辭職をせ  
ねばならぬか。否か。杞府院に決して、氏長の多數  
を制してゐる政府を追退し得る権能のあ  
るものはいらうか。然る所をえりて、政府は議院  
と争つて寧ろ議院の追退を上奏すべきであらう。  
兼、再かや、この立憲多數政治の實は、根柢  
を破壞せしむるにあり。

當つて若概の内容を前掲の如く味を占めれば杞府院  
ハ國家重大の問題を懸上りて載せ、是れを私争



の具に供し、再び内閣の誤踏と策謀しつること  
事、其故不可ならざるものがある。院が特査委員  
と奉るは、特に政府の又對のものなりと、  
如き何なる不公平の事、條約に關する特査、  
外交通の石井(菊次郎)すら加へて、  
ハ、其の術策を露と見むるあり、  
らあや。特査委員の所及の處、  
より任長ゆりたる大臣も出席せしめて可なる  
例も、  
外相ゆりの出席を求めたることも、横暴の  
所業にて、一面既、軍令部長と露女たる人が軍  
備案に平らぐることを知り、是れを物に委せし

ニ言ひんんとしてることをきき、一九二八年に在る頃の親徳の許  
こころ所々を比し、此の策動の鋒鋭の露いん比  
る所より、言ひ及ぶが、その職物を忘れて或る所  
倚り執在りたること、海甲部内にも秘密文書の院  
に漏洩し居ること、~~○七~~ 院の本心も其  
亦策動の一端を現し、そのとをきき、このを得ぬ  
んとして、その策動は五十の國の長官の間を以て  
から書生の存討論令のこころ、意地をさく、~~○~~  
の要もなきこと、日を矯り、世界の秩序、方々  
の環境を忘れ打ち忘れて、唯に政府の危也と  
んものとも、果ては己が職物の軌道を輕ん  
兵力を輕減税の数量をも入つて、



んとしてることをきき、~~○~~ 院の本心も其  
もき及ぶが、その職物を忘れて或る所  
倚り執在りたること、海甲部内にも秘密文書の院  
に漏洩し居ること、~~○七~~ 院の本心も其  
亦策動の一端を現し、そのとをきき、このを得ぬ  
んとして、その策動は五十の國の長官の間を以て  
から書生の存討論令のこころ、意地をさく、~~○~~  
の要もなきこと、日を矯り、世界の秩序、方々  
の環境を忘れ打ち忘れて、唯に政府の危也と  
んものとも、果ては己が職物の軌道を輕ん  
兵力を輕減税の数量をも入つて、

んとしてることをきき、一九二八年に在る頃の親徳の許  
こころ所々を比し、此の策動の鋒鋭の露いん比  
る所より、言ひ及ぶが、その職物を忘れて或る所  
倚り執在りたること、海甲部内にも秘密文書の院  
に漏洩し居ること、~~○七~~ 院の本心も其  
亦策動の一端を現し、そのとをきき、このを得ぬ  
んとして、その策動は五十の國の長官の間を以て  
から書生の存討論令のこころ、意地をさく、~~○~~  
の要もなきこと、日を矯り、世界の秩序、方々  
の環境を忘れ打ち忘れて、唯に政府の危也と  
んものとも、果ては己が職物の軌道を輕ん  
兵力を輕減税の数量をも入つて、

が野心を養ふ列強、殊に亞米利加之於ては飽  
き日本を不利に導かんとする下心あり、日本は近  
来世界の舞臺に立つる往年よりも愛に優  
越の地位に在んども、列強に伍してハるべく思  
ふ存分の外交手段を遣ふべきまゝ未だ列  
強の居るが、翻つて内地の子情を安んずるべし武力  
萬能を以つる念とす軍閥ありて、そのくま  
多強解を以つて居んども、政府は幸ひに戦令  
多敷を制し居んども、諮詢を得る所あり、  
四務の重きを忘るゝ政府の衰のを失とす  
る把持の成つたこととあり、はるかに四民の  
交はれあふる初弊、此の如く立つて軍閥の  
交はれあふる初弊、此の如く立つて軍閥の

漢文

の如きを料理するの政次家のたの難くとする  
所也、その申論修約の文をさるるがごとく云  
へ尚ほ前回の比まゝに式許優る所あり、さるる  
と次の如く述べつけ得る全権の功を多とせし  
可らざる、略し軍閥の舞臺も亦た衰ひ、把持の  
たけり一脈あるも、そのと統托し、此の四陸  
的の重大修約を新棄して、敢て黨利を固  
らんとする政友會の固を棄つる徒と云はれし  
何人と評すべしや、幸ひも首相が心を踐ん  
高きも懼る所無し、はるかに把持を抑へ、  
陣巻を得る所以とす。近頃の手段と  
稱へるを得ぬ。

九月十三日記

### 石油燈用之便

明治七年發行の『石油燈用之便』なる印刷物小生の手に入り申候。右を一讀するに其の當時の石油の模様ハツキリ分るやうにて、甚だ面白く感じ候故、其寫しを御手許に差上候。貴誌に餘白あらば御掲載下され度候。

日石下松製油所にて  
佐藤健三

#### 石油燈用之便

#### 報告

夫れ（ペトルリウム）石炭油の地中湧出の儘なるものの物たるや内外各地方に於て湧出すこと夥しく、隨て汲めば隨て湧く、實に無量の貴物にして、其形を以て石炭等を蒸溜し油を得ると同一の作用を地下に於て數百年の間に爲し得るものにして海動物

陸植物との各元素抱合して適度の地熱に因て化成するものならん。所謂造物主の賦與する貴品なり。既に合衆國にて之れを清潔にし燈用に供することを得て活潑たる興奮を起し、甚だ繁殖するに至るは、之れを以て最も富國繁盛の大事業とす。今や新潟縣下に於て（ペトルリウム）の産する日一日より夥しく、何ぞ減せん、合衆國より輸出するの多きにや、他日其鴻益内國に冠たるを視ん。然りと雖も物皆利害あり。此石炭油に於ける最も非常の利あり、又非常の害あり。其利を取て害を去り、用を爲す、之れ人の功なり。抑も此石炭油を燈用するに、種油に比すれば數倍の光明を保すと雖も、其質猛烈に

して銃用の火薬に均しく、就中俗云徳用草水油と稱ふるものは輕微揮發の性分にして、一たび過て燃發すれば看々救防するを得ず、動もすれば千百の家産を灰燼し、或は貴重の人命を傷害せしむ。嗚呼恐れても尙懼る可きは石油の燃發するを。故に近時重質の性分を以て火留ヒドメと唱へ、之れを賣販して危害なきを要すと雖ども、製煉の粗工なるか適々火度の強弱を呼で質の輕重に注意するもの妙し故に火留とするもの悉く赤黒に變ぜしめ或は煤烟の騰沸を測るを得ざるは世間専ら採用する（ランプ）器械なるもの合衆國に精油の質と火度を測量し而て製造するものに今此の異製の油を燈す故に油質と機械の適否より種々の利害を生衆之れを下品と唱へて復た更に輕微揮發油を好む。實に明して功用を知り其危険たるを知らず、終に天工の貴品をして有害不益の名を存せん。惜む可し、歎ず可きに非ずや。余此石油の精製と

弊害に注目すること茲に年あり。而て始めて石油の利害は製造の精粗、供用の巧拙に因て起り、油質の異なるあれば隨て燈器も又異なる可きを知り、油質とランプの適否より復た其利害忽ち轉變することとを研究し、茲に石油の亞量と重量と火度とを校訂して較々炭水二素の抱合物にして黄青色を則本性とす不變の精製法を得て、又一個の燈器を發明せり。由て當港字藤山に於て石油を精製し、其製油と燈器を賣販することを開く。請ふ四方の諸君茲に失火の臆念を休し、毎戸之を採用して夜間營業の便に供し、越後州の名産を海内に布き、其洋溢海外に布き及さんことを冀望する而已。

明治七甲戌年十一月

越後州石油検査所

新潟 藤田忠四郎述

（辭句はすべて原文の儘掲ぐ。たゞ原文の片假名を平假名に改め、又讀み易きやう句讀點を施せり。）

### ランプ漫談

前掲佐藤氏寄送の記事に關聯して、石油ランプに關した話二つ三つを掲げやう。

石油ランプは明治以前、安政—慶應の頃から弗々使用するものあつたのは、文久二年版の『横濱港見聞誌』に、『異人室内、中にも重金なる美製の燈台美事にかざりあり』といひ、又同二年版に『夜分に至れば、燈台にギヤマンの上覆をかくれば、其の明るきこと毛一筋をも見あやまつことなし、何れも屋敷の門の上にギヤマンにて製造したる行燈の如きものなり』とあるのでも知られる。併し共に

未だランプの名稱を記してない。

明治に入つてランプの使用者は追々殖えて來た。明治五年正月の『日要新聞』第四號に、正月八日神田旅籠町の火事はランプの火より起りしことを記し、同五號にランプ取扱の忠告文、同六號に東京府の取扱布令がある。其の布令の要領を記せば左の如し。

近來ランプ流行して毎戸に點燈し、人々愛翫いとくわぶ云々。火氣石炭油に移る時は油胴破裂して一室中忽ち火焰を散すに至れり。

一、ランプを掃除し油をつぐは屹度晝間に致しおくべし。夜火の近處に取扱ふまじきこと。

一、ランプ並油壺を火の近所に置くべからず。

一、萬一燃上る節は風呂敷又は

ケツトの類を以て押消すべし、水を注ぐべからざることを、ランプ使用の初期だけありて、諄々として諭して居る所甚だ奇である。

明治六年四月『戯道具競べ』に、ランプと行燈の喧嘩を記した漫画入りの一文がある。其の一節。

『あんどん曰、なんだ今ぢや、らんぶなんどと名をつけて、ざしきのまん中にぶらさがり、すこしわ、おれやろうそくのめへもあつたものだ、あんまりこばかにしてもらうめへせ。』

『らんぶ曰、なんでもおれのあかりを、立ててもらおうせへ。』

『石たん油曰、そんな事が、いわれちやアこまるせ、らんぶばかりのわざじやアねへ、おれも

そこにあもんくがある。さわがずともさいてくんねへ。

『東京繁昌記』にも『玻璃燈明而壓、螢雪光、』又『玻璃燈起而行燈睡』等の句がある。

尙ほ當時の新聞、雑誌に散見せるランプに因める詩歌一二。

ランプの心はびん漬の眞田蟲

玉木

赤い心をおくそこなしに見せて

やさしい釣 LAMP (聲くらへ)

繁昌詩選

軒先高沿酒醺興

出椽豈俟月代鉦

紅影廣移氈席耀

金光遠入水盤氷

蒲廬硝碎詰權介  
石腦油鹹叱小僧

六大區中方四里。  
黃昏無處不洋燈。

佐田介石は、舶來物亡國を絶叫し、ランプ亡國論者の綽名を得た。明治十五年五月版『世直しいろは歌』の中に、

ラ、ランプにて三度も五度も家を焼き又もこりずに石油たく人。

シ、燭台や行燈すて、ランプにて我家焼いて野宿する人。  
と、ランプを詠むこと二首に及んで居る。

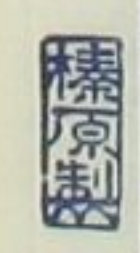
の極地の探検は、幾々各回に試みんと決して、  
いよいよ決まらるゝか、多くは失敗を悔して、  
其の拂ひは、  
北極地の探検は、  
従来の不成就は、  
科多の力の後が、  
度外既び、  
つてあり、  
際不可能である。今、  
の探検家の熱心は、  
とらうれば、  
探検家の計画は、  
う。此頃より、  
探検家が不幸

探検

申道び、  
遺品を、  
後の今日、  
こころの、  
其の力、  
極地探検、  
其の心、  
の南極探検、  
か一行、  
とも得、



時一九二八年八月廿五のロイヤル・ド、ロイヤル少将  
の南極探検隊の一行四十二人、エター、ラゴ、ニウ  
ヨーク、強、乗、この紐育を出発した。余、ヤ  
ニエー、ジョーランドのタチ、テン、に、着、港、と、為、取、の  
準備をせよ、金、十二月二日、一、以、南、極、向、つ、た。  
北行約一年半の糧食の供給を要する、此、為、の  
一、般、の、糧、食、船、を、付、あ、た、他、に、也、家、の、供、給、と、云、ハ、  
飛行機の如き大なるものあり、紐育と直接  
通信を交わす、此、亦、極、地、の、各、所、と、電、信、を、交  
わす、此、大、なる、異、機、をも、要、し、極、地、に  
冬、氷、り、を、す、為、め、自、家、心、を、建、てる、此、大、の、地  
般、の、材、料、の、積、こ、せ、れ、か、ら、積、荷、の、積、る、大



と、す、も、の、あ、つ、た、こ、の、方、も、亦、も、ま、い。

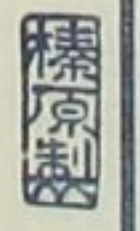
北一行が南極大陸の一端ロックス海に到着した  
十二月廿五日、この日、航海は二十三日間を要し  
る。北極の極地を風に出遇ひ、亦流氷と感  
ん、當、り、氷、を、割、き、破、つ、て、進、む、行、進、を、つ、い  
けれ、先、暴、風、映、畫、に、映、ら、ん、こ、も、ま、一、行、の、才、一、の、行、動  
ハ、ロ、ッ、ス、海、の、あ、る、地、點、に、上、陸、し、極、地、を、心  
う、こ、し、ひ、あ、つ、た、其、の、地、點、ハ、懸、湾、の、湾、内、に  
當、つ、て、ア、ム、ン、ゼ、ン、が、根、據、地、を、心、つ、た、所、と、云、ハ、  
ら、る、亦、也、あ、つ、た、一、行、ハ、此、地、に、在、る、小、氷、米、加、と、命  
名、し、上、陸、地、も、さ、く、先、の、電、氣、局、を、設、け、し、  
電、氣、局、受、電、の、設備、を、形、の、如、く、と、敷、置、ひ、た、此

設備こそ亦も大切なるものがあるが既に松をハ切  
ることこそ設備することの出来らう。この設備  
の先、雪の降る十数日一行の身を托すことへの位  
を往々各々することもあるが、この設備の  
中を凍るべき年足に働くのであるから、夏の困難  
の状に映るべきものであると示さるる。式千と  
るべき箱入りの糧食が雪上の積り重なること、  
が自から障壁ともなる。二行は積重放らして中間  
のト子ルに於ては、此きことあると糧食の積り、  
ト子ルに入つて追々取り出す取向とせえん。バラツ  
クを心して為らるるは、じめじめ風をえん。此の積り  
よぶ交る枚とせえん。地上に運んで、雪をえん。材

松の積り

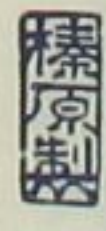
料とせえん。家々いゝよぶが出来ん。個々の所は松を  
ハ雪も建築の一種の材料、尺四方角、ノエギ、  
ハ断えん。プロツクが乾かして煉化の役主とせ  
し。てみる。飛行機の格納庫、此の格納  
ツクハ四方を圍んで、飛行機の格納めとせ  
ん。バラツクの中、不完全な多量の書冊を  
別へる棚もある。テ、ゲル橋もある。炊事、洗濯  
の油房もある。電信を交換する。一室の殊に松  
柱を柱めし、状に映る。雪をえん。てみる。  
紐着から此の根拠地まで、一帯一千哩、氣温は零  
下二十二度の酷寒地、南極の目的地を高く、  
西の距離がある。てある。夏に、一帯、一帯、此

つて翌年の春の帰るを待たざるゝぬ、極地の冬  
の冷々たる夜が大陽を絶對に見ることが出来る  
家を出るゝる見ると木の根をもちもして出るけん、船  
夫と集りて出ぬ、晴果がある。乗船も舟艀も船も  
早くゆて、ぬぐ氷で閉りこめると進退をさす  
ことなるもの、根極地の経度か、成試ると、  
解るん、グレートバレーを去れば、のびあるか、幕営す  
の二行の相々、靴もあつた、ギン馬や、海らじ  
時々巨体を現はす、鯨鯨の、アザラシや  
勿論此の幕営す、後々時を去す、こととせ  
ず、雪術隊の機を大又、奥か、を各所を採捨も  
し。

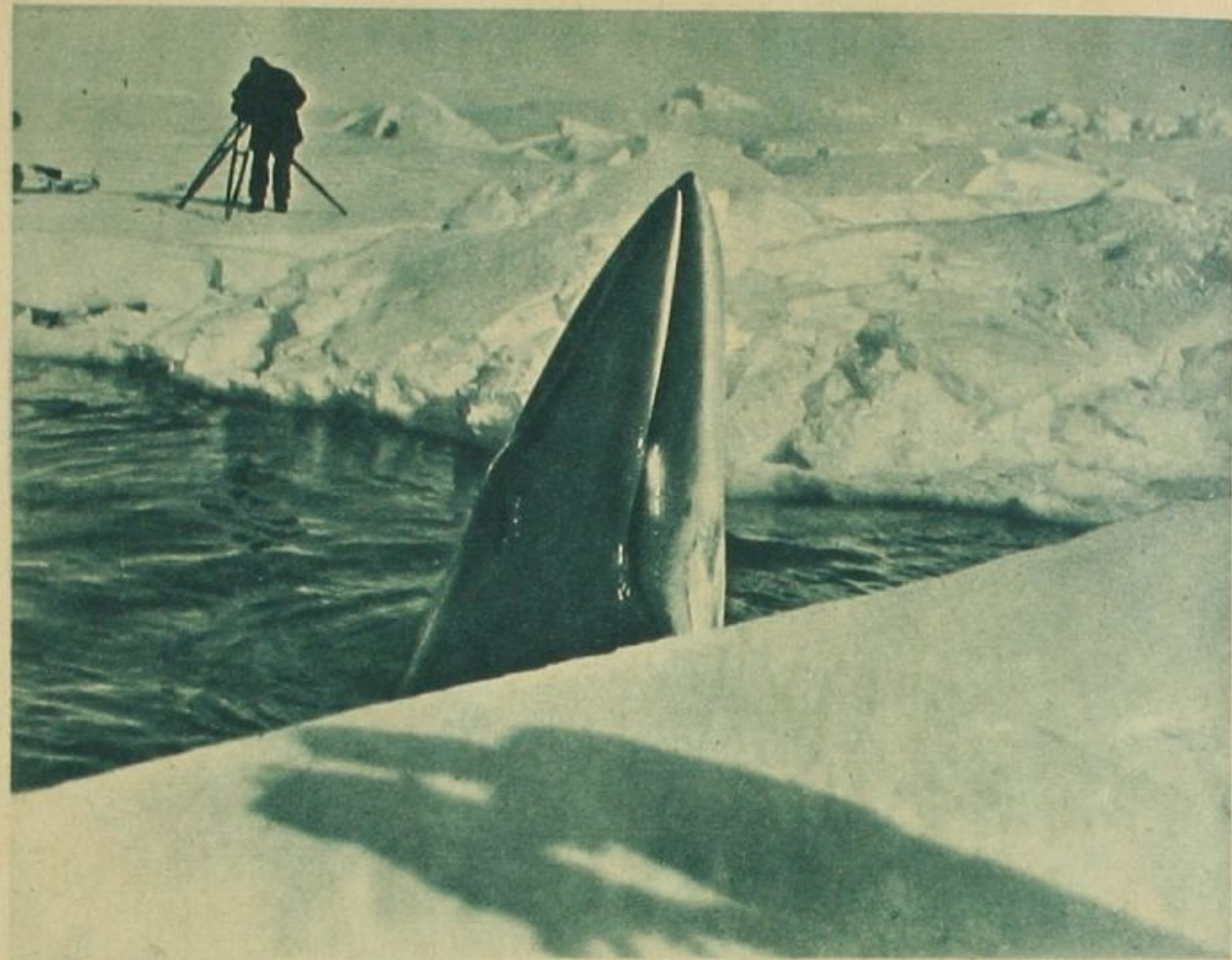


南極の冬と云ふのは四月から九月の末までを云ふ  
であつて、北極の飛行機も機も今も働かざる事  
ことが出来る、十月に入つて如く一陽未復  
天日を拜することが出来ぬ、カネ術が踏躍して目的  
地を冒険飛行を試みる、ことなる、この十一月  
月がある、もう飛行機先は、不時着陸の事  
他の事、何と、何と、何と、何と、何と、何と、  
心も、何と、何と、何と、何と、何と、何と、  
大、何と、何と、何と、何と、何と、何と、  
業かあつた、下、北の冒険中、十七年前、アム  
ニゼンが、残りの遺言、冬着して無限の  
底、打たれた、と云ふ。

ハート少将の金銀大飛行も決行し此の十一月廿八  
日目的を達すると云ふハ一に敢て北の飛行が  
目的地に着き得るハ云々在り此の勿論こ  
レに至るの航路は漠々氷の天を突破す  
ことハ所謂破天を志ス一層ハ天地開闢以來  
南極の如きことハ亦知らざること也幸ひ  
無事南極の真上を達することが出来たこ  
レも幸すも飛行機の行手を遮るるグリ  
ニ、モードの大山脈もあつた、雪を飛び破る  
ハ一萬五千呎の高度を保たねばならぬと云  
ふハ、ハート少将ハ南極の真上から二千五百呎まで  
下降し、雲を開き、星條旗を降下して均等に



あつても翌二十九日無事根拠地に着き  
二十時頃を過ぎた。根拠地のまわりのお祭り騒ぎ  
は先般に比後乗者も大なる功あり、三四人のりて及  
めて一言合し、運んできた状態が奇天に現れん  
観者として無限の感嘆を感へてしめられた。  
ハート少将の壮烈なこの成程も終りを告げられた。前  
一行を乗せた一連ゆふにヒステリック、ラスニエーヨー  
ク諸の来る迎へるを待ち、十四ヶ月文化と絶縁  
の境を去る一行ハ、三月十日ニエー、ジェーランドの  
夕子、ライン、定例、六日、十九日、四氏、歓呼の  
中、無事但着き、着いた。



新しい探険の準備に、いそむり仕方がなかった。  
 一九二九年十月、春は再び彼等を助ける。長い夜が明けて南極大陸の最高峰に最初の曉の光が射し始める。一行は歓喜の叫びを擧げて明け行く空に旗竿高く國旗を掲揚するのであった。十一月に入つて愈々根據地から南極まで往復千六百哩の決死の大飛行が敢行される事になった。  
 その飛行に先立つてグルード博士の一行は不時着陸その他の事故に備へるため四百哩に亘る小根據地を作るべく、犬の機隊を組織して「リッセル・アメリカ」を出発した。途中で偶然にも十七年前アムンゼン氏が残した記念の遺品が発見されて、一同の感懐を深からしめた。その間にバード少将は愛機「フレイド・ベネット」(フォッカー單葉機)にガンリンその他必需品の積載を終へて、今はたグルード博士からの報告を待つばかりであった。  
 博士等の出發後一週間、十一月廿八日愈々この大飛行は敢行された。操縦者バルチエン氏、無線技師ジュニン氏、測景係マツキンレイ大尉、それにバード少将及びパラマウント・カマランの五名が同乗して「フレイド・ベネット」は探険隊員一同の歡喜に送られ、見渡す限り雪と氷の一大平原の上を一路南を指して飛び去つた。飛行機の行手をさえぎるクリン・モード大山脈を飛び越えるために一萬五千呎の高度を保たねばならなかつた。  
 遂に飛行機は南極の眞上に達した。バード少将は機を二千五百呎まで下降させて、窓を開き、直下に「世界の底」を眺め乍ら靜かに星條旗を投下するのであった。  
 「リッセル・アメリカ」の根據地に一行の安否を氣遣つてゐた残りの連中が早くもラヂオでこの報を知つてお祭騒ぎをしてゐる中を「フレイド・ベネット」は暴風の中に難航を續け乍ら滞空二十時間の後翌二十九日無事根據地に着陸する事が出来た。  
 やがてグルード博士の機隊も無事に根據地に引揚げ、今はた再び冬の巡り來らぬ中に極地を引揚げるばかりと成つた。  
 一九三〇年二月十八日、特々に持ちた「レタイ・オブ・ニューヨーク」は懐しい姿を再び航海に現はした。十四ヶ月間文明から見離されてゐた探険隊員は歡喜に満ちて引揚げの仕度に忙殺される。  
 かくて探険隊の乗船はロス海を抜けて、三月十日、ニュージーランドのダネディンに寄港、六月十九日、國を擧げての大歡迎の中に無事紐育に歸還して、この前古未有の大探険は結局を告げたのである。



一九二八年八月廿五日、リチャード・E・バード少将の率ゐる南極探険隊は「レタイ・オブ・ニューヨーク」に乗込んで紐育港を出発、その壯途に就いた。巨船「リウエイアザン」はこれを港外まで見送つて行を盛にするのであった。  
 途中、ニュージーランドのダネディンに寄港して萬端の準備を備へた。一行の乗船は同地で糧食補給船「エリノア」を泊り、ニュージーランドの、愈々十二月二日、一路南極へと向つた。  
 途中猛烈な嵐を閉じ、また流氷に苦しめられ乍ら、十二月廿五日始めて南極大陸の一端ロス海に到着する事が出来た。一行は直ちに上陸して此處に第一探険根據地を建設する事に成つた。其處は鯨灣の灣内で、嘗つてアムンゼンが一九一一年の南極探険に同じく根據地とした地から程遠くなかつた。バード少将は此處を「リッセル・アメリカ」と命名した。四十二名の一行が今後十數ヶ月を暮すべき假の住家及び紐育と直接通信を交換し得る大無線局が建設された。こうして根據地の設備が完成すると「レタイ・オブ・ニューヨーク」は積氷の季節が近づかない内に此處を引揚げなければならなかつた。  
 紐育から一萬一千哩、零下二十二度の酷寒の地に、ペンギン鳥と鯨と、あざらしを隣人として彼等の新しい生活が始められた。  
 間もなく總隊と飛行機隊とによつて根據地を中心に數回の奥地への探険が試みられた。或る時は猛烈な吹雪に一行中の或る飛行機が大破して、バード少将の決死の冒險飛行によつて危く救助された事もあった。  
 やがて翌年三月に成ると、南極の冬が近づいて來る。太陽は水平線の彼方に没して四月から九月まで半年の常闇が地上を包んで了ふのであった。極も飛行機も用ひるに術なく、小屋に閉ぢ込められた一同は

### バード少将南極探険

製作………パラマウント映畫會社  
 撮影………ジョイアドヴィ・ワイア  
 編輯………ジョセフ・E・ラツカー  
 字幕………エマニュエル・コイエン  
 字幕………ジュリアン・ジョンソン  
 發賣………一九三〇年六月廿八日

### 【梗概】

此の政畫の如く人と慈きつけ武臣を能く治る事  
のありて自らも満るの爲め一時分封入るこ  
とが出来らうかつた。利退師比治山坊のハ  
入師を待師へとつて群衆に逢ふ満ちをあらわす。  
九月十四日、於て五日の間にあつた。

○我のまゝの悲愴の更の夫少からうあつても其の  
後世の傳へる事あり亦全く懐減のゆゑ傳へる  
事とあり。推尊親王の御事蹟のこときハ其  
一より、親王ハ文徳天皇皇太子の皇子と在らせり  
ハ皇儲の位に立させらるべき筈なり。親王



七の皇太子時在大臣推尊親王良房の母が皇子を生  
又其の東宮に立んことを奏請しつゝ、後、文  
徳天皇七女の次弟を立ふことを立上り給ひて  
リ。而時推尊親王の権勢ハ旺盛の時を、天  
子ハ亦在りし。推尊親王ハ止らるゝ良房の  
所を許さへ。後、位に即かんと欲すが、治和天皇は  
乃ち弟の皇子推仁親王を、推尊親王ハ幼  
少の所を、推尊親王の身とて、推尊親王ハ  
入師ありし。後、江の河の世に、愛知川  
の上流山深く御抄探検の上、地を相し、空岳を  
建せさせん。愛知山推と親其を因わし、あつた  
親王の力めさせん。耕耘のこゝと、御奨励あり

上は、樹木を伐つて挽物を作ることを指す也  
りたること、挽物の業大いに起り、後世此の  
親王をもて此業の祖と稱し、此の親王は、  
皇儲たるべき人が外戚の爲り、左にせむるに、  
二皇と云ふ方々の敢て、此の親王は、  
う近くと、此の親王は、  
ゆふありき、此の親王は、  
と静子と申し、此の親王は、  
あり、亦此業平の、此の親王は、  
る有常と云ふ、此の親王は、  
も有常の常、此の親王は、  
常、清歌のおお手と云ふ、此の親王は、



母之は此の親王の御子の殺のおお手と云ふ

業平と唱和の詞といふ、此の親王は、  
又世のあいきさつを、此の親王は、  
るが、挽物に業平、此の親王は、  
大岩氏も、此の親王は、  
すんとも世の特格と持、此の親王は、  
少、此の親王は、  
云い、此の親王は、  
この次三十三、此の親王は、  
る、此の親王は、  
皇族係中、此の親王は、  
史料、此の親王は、  
後世所感と云ふ、此の親王は、

九月十一日

○大正九の句協を購ふ

をいふよ一初めのこと

をいふ一初

えん大江丸を名の句行年八十の年、押是  
華及雄豪の氣を失はるるめを乞ふ

○軍備條約案：對し杞府と政府との抗爭に就  
ていふの決定を乞ふ數の前後：吾ら所信を記し  
此協を政府の利ありとしんか、此協難ありと  
條件可決を乞ふに對し、五十數日、杞府を乞ふ



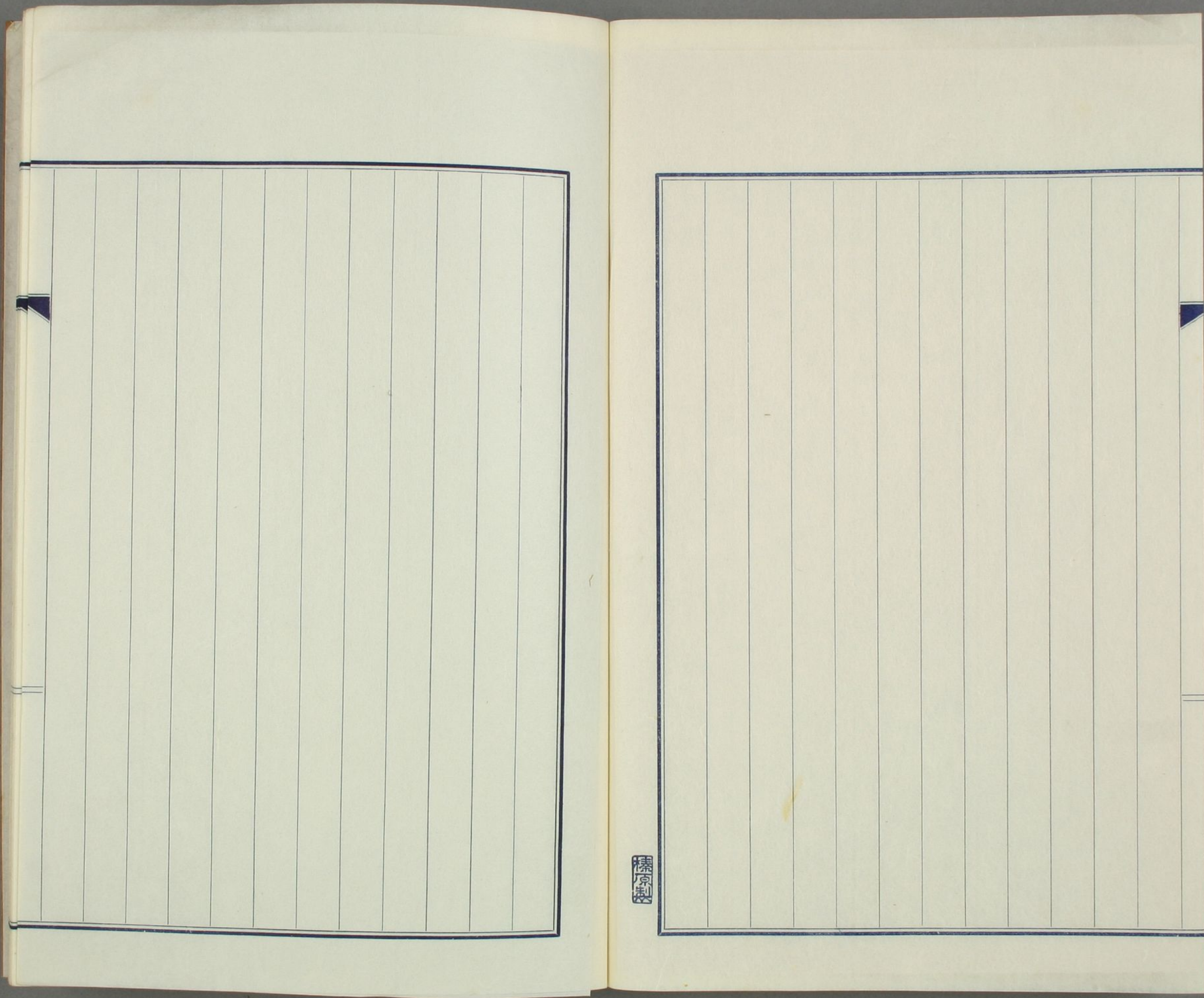
不と突つ出つれ、よかれば、いせり、可決し、と云ふ  
うふ、い、官軍多滑秋多と云ハ、とを得ぬ、正しく  
こん、字取、勝利がある。全體、國家の榮辱の  
繫る、四隣問題、を玩弄するの趣、議者と  
待た、數年、感念、す、所、乞、之、乞、重、臣、も、流、石、に、杞  
府の、横暴：左、視、も、杞府の、顧問、を、中、ま  
心、あり、よ、委員の、行動、を、非、とし、杞府、自  
爆の、原因、伊、東、委員、も、此、形、勢、を、見、し、杞、も  
外、務、省、も、杞府の、体面、し、七、顧、念、の、餘、地、を、乞、  
送、早く、轉、身、し、七、屈、服、を、由、義、を、乞、  
府が、意、欲、擁、護、の、為、の、電、を、  
飽、も、強、硬、の、態度、を、維持、し、  
捨、身、を、乞、  
飽、も、強、硬、の、態度、を、維持、し、  
捨、身、を、乞、



へんはこれのいある。こん、就て笑止千萬ちる。政友  
会の態度はである。彼等、輕率にも軌道を通  
してみる。樞府の横暴に乗つて、其の横暴を  
聲援した。彼等、堂あるも知つて意図ある  
ことを知らざるの正体を知らなくとも暴露した。  
彼等、樞府の聲援する餘り、議會にも樞  
府重しとまふ公言し、此條約に就ては、亦此の  
國際條約の重きを重くし、是れとまふ放言し  
此、公堂は、政友会の脱線も甚ししと云はざるを  
得ぬ。此等の言論は、皆四論に反對するものなり  
也。見談及令の取り返しのつかぬ放言をうけ、  
がある。まは樞府が憲法に屈服し、たとふると、政

櫻井製

友会、何んの面目があるのだ。樞府の屈服を取  
り、まは、政友会からの屈折がある。なるとまふ  
言へ換へんは、政府は二重の勝利を得た。ひま  
の、憲法擁護のあり、極力開つて、民政堂政府  
の権を突いた。政友会は、憲法の敵と云はれる  
と、免れ、政友会の日洋判から、さう復るは  
得る。其の自失態を見て、政友会の醜態を非難する  
ことの日一日、清らるるとまふ。折柄、政友会  
今次の行動の、向は、政友会論者、堂樂  
と非する。折柄を興へ、まは、政友会の面目上  
共々、いこと、まは、まは、得ぬ。九月十八日記



蘭  
文  
房

以下全て  
白紙

